

# ★子育て応援とうきょう会議

平成 19 年度 事業報告書



東京から示そう 子育て環境日本一

# 目 次

## 巻頭

子育て応援とうきょう会議マスコットキャラクター及びロゴマークほか

## 第1 子育て応援とうきょう会議の概要

- 1 設立趣旨 . . . . . 1
- 2 位置づけ . . . . . 2
  - 参考 子育て応援都市東京・重点戦略 「3つの目標」と「11の重点戦略」 . . . 2
  - 資料1 「子育て応援戦略会議」の概要 . . . . . 3

## 第2 子育て応援とうきょう会議の開催状況

- 1 子育て応援とうきょう会議の開催状況 . . . . . 5
- 2 子育て応援とうきょう会議実行委員会の実施状況 . . . . . 6
  - 資料2 第1回子育て応援とうきょう会議 会長挨拶 . . . . . 7

## 第3 平成19年度事業報告

- 1 子育て応援とうきょう会議イメージキャラクターの起用 . . . . . 8
- 2 子育て応援とうきょう会議フォーラムの開催 . . . . . 9
  - 参考 新聞広告 . . . . . 9
  - 資料3 子育て応援とうきょう会議フォーラムの実施について . . . . . 10
    - 資料3-1 子育て応援とうきょう会議フォーラム 開会あいさつ . . . . . 11
    - 資料3-2 子育て応援とうきょう会議フォーラム トークショー . . . . . 13
    - 資料3-3 子育て応援とうきょう会議フォーラム トークセッション . . . . . 25
    - 資料3-4 子育て応援とうきょう会議フォーラム アンケート結果 . . . . . 57
- 3 子育て応援とうきょう会議マスコットキャラクター等の公募 . . . . . 59

## 子育て応援とうきょう会議

### マスコットキャラクター・キャッチコピー・ロゴマーク

子育て応援とうきょう会議では、本会議の趣旨や取組みを広く都民のみなさまに知っていただくため、その象徴となるマスコットキャラクター及びキャッチコピーを公募し、次のとおり選定しました。採用した作品は、今後、本会議の取組みの中で活用していく予定です。

### マスコットキャラクター



作成者 岩倉 隆行 さん(鹿児島県)

### キャッチコピー

東京から示そう 子育て環境日本一

相撲 正一さん(岐阜県)

### ロゴマーク

本会議で使用するロゴマークを次のとおり決定しました。

<コンセプト>

すべての子どもと子育て家庭を支援することから「支える手」の形で表現。支える手の形が組み合わさり、星の形を形成。「星」は希望を表し、安心して子育てができる社会への実現を表しています。また中央の3つの円は子育て家庭(親子)を表しています。



# 第1 子育て応援とうきょう会議の概要

## 1 設立趣旨

未来を担う子どもたちが健やかに成長できる環境を整備するためには、行政、企業、NPOなど社会全体での取組が必要です。社会全体で子どもと子育て家庭を支援する機運を一層高めていくため、幅広い分野の団体が構成する「子育て応援とうきょう会議」を設立しました。

### 東京の現状

核家族化や、都市化による近隣関係の希薄化は、親や地域の子育て力を低下させており、「子育て」に対する負担感が増大  
育児休業制度や企業における労働時間の短縮など、働きながら仕事と子育てを両立していくための環境整備が不十分。特に父親の育児参加が課題。  
都内における保育所の待機児童数は毎年5千人前後で推移している。また、働く女性の一層の増加や雇用形態の変化などにより、多様な保育サービスに対するニーズが高まっている。  
段差の多い場所でのベビーカーの移動など、子ども連れの外出には困難が伴う。「子ども」や「子育て」の視点を取り入れたユニバーサルデザインの取組が課題。



子どもを産み育てたいと望む人たちが安心して子育てし、子どもたちを健やかに育てることのできる社会をつくる

### 子育て応援とうきょう会議の取組

#### 趣旨

主体的取組の促進  
幅広い分野からの参加を得て、主体的取組を進める。  
気運醸成  
「社会全体で子育てを支援する」気運を高める取組を機動的に行う。

#### 課題の柱

##### 働き方の見直しの推進

仕事と家庭生活の両立に向けた企業や都民の意識改革  
ライフステージに応じた柔軟な働き方ができる仕組みの導入・促進  
子どもと過ごせる時間をふやすための長時間労働の縮減推進

##### 子育て支援サービスの改革

多様で弾力的な保育サービスの拡充  
身近な地域での子育て支援サービスの拡充

##### 子育てにやさしい環境づくり

駅、商店街等、子ども連れでも気軽に外出できる環境の整備  
「子育て」に関する情報提供の充実

#### 構成団体等

学識経験者 経済・労働分野 関係業界・事業者団体（保育、教育、流通、交通、医療）  
NPO 大学 行政等

東京都全体に運動を展開



すべての子どもと子育て家庭を社会全体で支援

## 2 位置づけ

東京都では、「10年後の東京」(平成18年12月)で描いた「社会全体で子育てを支援する」という姿の実現に向け、大都市東京のニーズに即した、より効果的な次世代育成支援策を実施するため、各局の連携をこれまで以上に強化し、総合的かつ機動的に施策を推進することを目的に、「子育て応援戦略会議」(資料1)を設置しました。この会議では、働き方の見直しの推進や、子育て支援サービスの改革、子育てにやさしい環境づくりについて、さまざまな角度から集中的に検討を進め、保育所や学童クラブの整備など、働きながら子育てできる環境の整備だけでなく、柔軟な働き方が選択できる仕組みづくりや、子ども連れでも気軽に外出できる環境の整備など、今後重点的に取り組んでいく施策の方向性を「子育て応援都市東京・重点戦略」として取りまとめ、平成19年12月に発表しました。

さらに、将来を担う子どもたちが健やかに育つ環境を整備するためには、社会全体での取組が不可欠となります。

「子育て応援とうきょう会議」は、子育て支援の取組を東京都全体で展開し、社会全体で子育てを支援するという姿を実現するため、行政や企業、NPOなど幅広い団体の参加を得て、設立されたものです。

### 参 考

子育て応援都市東京・重点戦略 「3つの目標」と「11の重点戦略」

平成19年12月発表

#### 目標1

子育てと仕事が両立できる雇用環境を整備する

##### 【重点戦略1 働きながら子育てできる環境整備】

社内の両立支援制度の整備等への助成

(22年度までに1,500社)

ワーク・ライフ・バランス実践プログラムの作成・普及

##### 【重点戦略2 育児休業の取得促進】

育児休業代替社員雇用経費の助成

(22年度までに500人分)

##### 【重点戦略3 女性の再就職支援】

再就職サポートプログラム実施

キャリアカウンセリング窓口設置

#### 目標2

多様な保育サービスの競い合いにより、大都市東京にあったサービスを拡充し、待機児童5千人を解消する

##### 【重点戦略4 待機児童解消に向けた取組】

保育サービス拡充緊急3か年事業

(保育サービスの定員を22年度までに15,000人分整備)

・マンション等併設型保育所設置促進事業

・無利子貸付制度による認証保育所等の設置促進

##### 【重点戦略5 緊急的・一時的な保育ニーズへの対応】

病児・病後児保育に関する保育所等への技術的支援  
や情報提供

乳幼児の一時預かりサービスの推進

##### 【重点戦略6 総合的な放課後対策の推進】

放課後子ども教室事業の設置促進

(22年度までに全区市街村)

民間事業者の参入支援等による学童クラブの設置促進

##### 【重点戦略7 子育て支援拠点の強化と親の子育て力向上支援】

子育てひろばの機能を強化し、地域の子育て支援拠点に

#### 目標3

社会全体で子育てをあたたく見守り、支援する

##### 【重点戦略8 子ども連れでも気軽に外出できる環境の整備】

##### 【重点戦略9 子育て世帯に配慮した住宅環境の整備】

子育てに配慮した住宅の技術的指針(ガイド)の策定・普及

##### 【重点戦略10 安心して産み育てられる医療体制の整備】

周産期医療機関のネットワークグループの構築

医療クラークや交替勤務制の導入支援により医師の勤務環境改善

##### 【重点戦略11 社会全体で子育てを応援する気運の醸成】

子育て応援サイトの立上げ

(子育て応援とうきょう会議の取組)

( は新規事業)

## 「子育て応援戦略会議」の概要

### 1 設置の目的

「10年後の東京」(平成18年12月)で描いた社会の実現に向け、大都市東京のニーズに即した、より効果的な次世代育成支援策を実施するため、各局の連携をこれまで以上に強化し、総合的にかつ機動的に施策を推進していく必要がある。

このため「次世代育成支援対策推進会議」を改組し、副知事をトップとした「全庁横断型戦略会議」を設置した。

### 2 設置年月日

平成19年6月12日

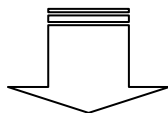
### 3 座長

東京都副知事 山口 一久

### 4 基本的な考え方と主な取組

すべての子どもと子育て家庭を社会全体で支援する

子どもを産み育てたいと望む人たちが安心して子育てし、子どもたちを健やかに育てることができる環境を整備することは社会全体で取り組むべき重要な課題



#### 主な取組

##### 重点戦略の策定

喫緊の課題である「働き方の見直しの推進」、「子育てサービスの改革」、「子育てにやさしい環境づくり」について、重点的に取組を検討・実行

##### 気運醸成に向けた取組

子育てにやさしい社会づくりに向け、企業・都民の意識改革を図る。

「次世代育成支援東京都行動計画」の推進

平成17年4月策定した行動計画(17年度~21年度)の着実な推進

資料 1

5 子育て応援戦略会議の構成

子 育 て 応 援 戦 略 会 議

<座長> 山口副知事 <委員> 関係局部長級 <幹事> 関係局課長級  
知事本局、青少年・治安対策本部、総務局、主税局、生活文化スポーツ局、都市整備局、福祉保健局、病院経営本部、産業労働局、建設局、交通局、教育庁、警視庁  
(事務局 福祉保健局)

働き方の見直し推進部会

<目指す姿>

- ・仕事と家庭生活の両立ができ、結婚・出産後も働き続けられる。
- ・ライフステージに応じた柔軟な働き方ができる。
- ・父親も母親も子どもと過ごす時間が十分にとれる。

<検討の視点>

- ◆仕事と家庭生活の両立に向けた企業都民の意識改革
- ◆柔軟な働き方が選択できる仕組みの導入促進（育児休業、短時間勤務等）
- ◆長時間労働の縮減
- ◆女性の再就職支援
- ◆八都府県と連携した「ワーク・ライフ・バランス」推進の取組 など

<関係局>

総務局、主税局、生活文化スポーツ局、福祉保健局、産業労働局、教育庁  
(責任局 福祉保健局・産業労働局)

子育て支援サービス改革部会

<目指す姿>

- ・保育を必要とする家庭のニーズにあった保育サービスが十分に提供されている。
- ・身近な地域に相談や交流のできる場が確保されている。
- ・児童が放課後楽しく安全に過ごせる場及びサービスが充実している。(学童クラブ等)

<検討の視点>

- ◆多様で弾力的な保育サービスの拡充（認証保育所、家庭的保育など）
- ◆認定こども園の設置促進
- ◆身近な地域での子育て支援サービスにおける民間の力の活用
- ◆学童クラブ・放課後子ども教室の拡充
- ◆親の子育て力の向上支援 など

<関係局>

生活文化スポーツ局、福祉保健局、教育庁 (責任局 福祉保健局)

子育てにやさしい環境づくり部会

<目指す姿>

- ・安心してお産ができ、適切に医療を受けられる体制が整備されている。
- ・子ども連れでも気軽に外出できるよう、子どもにやさしい施設・設備が整っている。
- ・住まいや街並みが子どもや子育てに配慮されている。

<検討の視点>

- ◆子ども連れでも気軽に外出できる環境の整備
- ◆子育て支援施設等の情報提供の充実
- ◆子育て世帯に配慮した住宅環境の整備
- ◆周産期医療体制の整備
- ◆小児救急医療体制の整備 など

<関係局>

都市整備局、福祉保健局、産業労働局、建設局、交通局 (責任局 福祉保健局)

## 第2 子育て応援とうきょう会議の開催状況

### 1 子育て応援とうきょう会議の開催状況

#### 第1回 (平成19年10月24日(水)9:30~11:00 42F 特別会議室A)

- (1) 会則について
- (2) 会長選任  
会長 株式会社東芝代表取締役会長・東京商工会議所副会頭(当時) 岡村 正氏  
(会長就任の挨拶は、資料2を参照。)
- (3) 子育て応援とうきょう会議の設置趣旨について
- (4) 参加団体の取組紹介
- (5) 実行委員会の設置及び実行委員の選任について
- (6) 意見交換

子育て応援とうきょう会議構成団体・委員名簿(平成19年11月現在)

分野種別	委員	団体名等
学識経験者	榊原 智子	(株)読売新聞東京本社 編集局生活情報部 記者
	渥美 由喜	(株)富士通総研 経済研究所 主任研究員
経済	岡村 正	(株)東芝 取締役会長・東京商工会議所会頭
	北浦 正行	(財)社会経済生産性本部 事務局次長
	森 まり子	東京商工会議所 企画調査課長
	和栗 安広	東京経営者協会 事務局長
	小林 茂則	東京都中小企業団体中央会 労働課長
労働	稲泉 健太郎	日本労働組合総連合会東京都連合会 副事務局長・政策局長
流通	石井 滋	(社)日本フードサービス協会 業務課長
	高橋 亜子	日本百貨店協会 政策統括担当マネージャー
	田中 勝	日本チェーンストア協会関東支部 事務局
交通	加藤 弘茂	関東鉄道協会 西武鉄道(株) 鉄道本部副本部長兼運輸部長
	西山 隆雄	東日本旅客鉄道(株) 鉄道事業本部 お客さまサービス部長
	平林 光政	(社)東京バス協会 専務理事
保育	川下 勝利	東京都社会福祉協議会保育部会 部会長
	進藤 克	(社)東京都民間保育園協会 会長
	宇田川 貴子	東京都認証保育所協会 会長
	廣島 清次	日本こども育成協議会 会長
幼稚園	矢内 敏江	東京都国立幼稚園長会 会長
	北條 泰雅	東京都私立幼稚園連合会 副会長
医療	松平 隆光	(社)東京都医師会 理事
大学	恵美須 文枝	公立大学法人首都大学東京 健康福祉学部教授
	武石 恵美子	法政大学 キャリアデザイン学部教授
地域支援	杉山 千佳	とうきょう子育てねっと チーフコーディネーター
	安藤 哲也	特定非営利活動法人ファザーリング・ジャパン 代表理事
	吉野 壽夫	東京都民生児童委員連合会 常任協議員
行政	濱島 明光	特別区児童主管課長会 荒川区子育て支援部計画課長
	宮田 信夫	東京都市保育担当主管課長会 あきる野市児童課長
	栗原 裕之	東京都町村会 瑞穂町福祉課課長補佐

印は会長

注意：なお、会長の岡村 正氏は、平成19年11月1日付けで、東京商工会議所会頭に就任した。



## 2 子育て応援とうきょう会議実行委員会の実施状況

### (1) 実行委員

学識経験者	榊原 智子 渥美 由喜	(株)読売新聞東京本社編集局生活情報部記者 (株)富士通総研経済研究所主任研究員
経 済	森 まり子 和栗 安広	東京商工会議所企画調査部課長 東京経営者協会事務局長
交 通	西山 隆雄	東日本旅客鉄道(株)鉄道事業本部お客さまサービス部長
大 学	武石 恵美子	法政大学 キャリアデザイン学部教授
地 域 支 援	杉山 千佳 安藤 哲也	とうきょう子育てねっとチーフコーディネーター 特定非営利活動法人ファザーリング・ジャパン代表理事
行 政	吉岡 則重	東京都福祉保健局少子社会対策部長

は委員長、 は副委員長

### (2) 実行委員会の開催状況

開 催 日	回	会 議 の 内 容 等
平成 19 年 11 月 14 日(水)	第 1 回	実行委員長の選任について 子育て応援とうきょう会議の取組について(意見交換) (実行委員会の役割・事業の進め方・協働事業の検討ほか) 平成 19 年度の事業計画について (フォーラム開催・マスコットキャラクター等公募・とうきょう会議ニュース の実施について)
12 月 21 日(金)	第 2 回	子育て応援とうきょう会議の取組について(意見交換) (テーマ設定の検討、委員提案ほか) 平成 19 年度の事業実施について (フォーラム・マスコットキャラクター等)
平成 20 年 2 月 20 日(水)	第 3 回	子育て応援とうきょう会議の取組について(意見交換) (テーマ事業の取組・協働事業・メッセージの検討、マスコットキャラク ター等の選考、フォーラムの実施結果報告ほか)
3 月 27 日(木)	第 4 回	平成 20 年度事業の検討について

子育て応援とうきょう会議会長 おかむら 岡村 ただし 正 氏 プロフィール

(株)東芝取締役会長、東京商工会議所会頭

(平成19年11月1日付で会頭に就任)

- ・岡村氏が取締役会長を勤める(株)東芝は、平成17年度ファミリーフレンドリー企業表彰厚生労働大臣優良賞受賞

開催日時 平成19年10月24日(水) 午前9:30～11:00

ご紹介をいただきました、岡村でございます。この度、会長にご選任いただきました。この会議の成果を最大限に発揮するために、全力を挙げて取り組ませていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私は立場上、会社は東芝におりまして、あるいはいろいろな形で公職を担当させていただいておりますけれども、特にこの少子高齢化の問題は大変深刻な問題だと理解をしながら、常々、過ごしております。一つは先ほどご説明がありましたように、社会の活力を減退させるという、非常に大きなインパクトを持ってありますし、経済的にも労働人口の減少でありますとか、あるいは社会保障制度の根幹も揺るがす大きな問題になる、長期的に計画的に取り組まなくてはならない問題だと思っております。

私見をちょっと申し上げさせていただきますと、なぜ日本が、今、少子高齢化なのかということを考えてみますと、一つは働く意欲のある女性が、子育て環境が不十分なために出産を断念されるケースが多いということ、核家族化ということに代表されるようにコミュニティーの連帯感が欠如してきていること、また日本特有の文化と申し上げてもいいかと思うんですが、男性と女性との役割意識というものが潜在的に存在し、それにより男性の長時間労働が助長され、また、そういった風土が出産数の増加を阻害しているのではないかと思っております。さまざまな角度から、この問題には取り組まなくてはならないと思っております。

したがって、この問題の解決に向かっては、これからいろいろ議論をいただきますけれども、一つは、ワーク・ライフ・バランスをいかに実現していくかを、労使双方がしっかり話し合っ決めていかなくてはならないということ、また子育て環境の整備という意味では、行政当局の大きな努力をお願いしたいと思いますし、加えて、民間ベースでは、地域コミュニティーをいかにして子育て環境にふさわしいものにしていくかということがポイントではないかと、私自身では理解をしております。

今日、ここに子育て応援とうきょう会議が開催されるわけですが、メンバーをごらんいただいてもおわかりいただけますとおり、さまざまな立場の委員の皆様方にご参加をいただいております。皆様のお力を借りながら、とうきょう会議としての運動をぜひ広めていきたいと思っておりますので、ぜひご協力をお願い申し上げます。

### 第3 平成19年度事業報告

#### 1 子育て応援とうきょう会議イメージキャラクターの起用

(1) イメージキャラクター 薬丸 裕英氏

(2) 就任式

平成19年10月24日(水)

東京都庁第一本庁舎6階 記者会見室

(3) 選任理由

子育て応援とうきょう会議では、本会議の取組を進めるためには、広く都民に関心を持っていただくとともに、子育てをみんなで応援しようという気運を高めていくことが必要であると考えている。特に「男性の育児参加」は大きなテーマの一つである。

薬丸氏は、現在俳優・タレントとして活躍。また4人の子どもの父親でもあり、家事・育児も積極的に参加していることから、子育ての体験を通して、子育て支援の必要性を呼びかけ、若者や子育て中の都民の共感も得られる人物である。

以上の理由から、薬丸氏を本会議のイメージキャラクターに選任したものである。

(4) 活用予定

フォーラムやキャンペーンなどをはじめ、様々な取組を行っていく。

#### 薬丸 裕英 氏 プロフィール



1966年生まれ、東京都港区出身

1981年、TBS「2年B組仙八先生」に出演、翌年5月5日「NAINAI16」で、シブがき隊としてデビュー。

その後7年間、数々の実績を残し1988年、解隊しソロになってからは、数多くのドラマ、バラエティー、コマーシャルなどに、俳優・タレントとして幅広く活躍中。

家族は、妻と子ども4人。3男(高校2年生、中学2年生、小学2年生)1女(小学2年生)の父として家事・育児にも積極的に関わっています。

## 2 子育て応援とうきょう会議フォーラムの開催

会議の最初の取組として、これから子育てを始める若者を中心としたフォーラムを開催した。

- (1) 開催日時 平成20年2月2日(土) 13:30～16:30
- (2) 開催場所 江戸東京博物館ホール
- (3) 実施内容(資料3を参照。)
  - ア イメージキャラクターによるトークショー
  - イ 若者が参加するトークセッション
  - ウ 参加団体のポスター展示
- (4) 参加人数  
310人

### 参 考 新聞広告

読売新聞 平成20年1月5日(区部) 1月6日(多摩地区)

日経新聞 平成20年1月9日

子育てにやさしい社会をめざして

# 子育て応援とうきょう会議が始まります!

※とうきょう会議は、社会全体で子どもと子育てを応援する気運を高めていくため、企業やNPOなどの幅広い分野の団体が構成されています。

**仕事や子育てを始める若いみなさんや子育て真っ最中のパパ&ママを応援します。**



子育て応援とうきょう会議 イメージキャラクター 葉丸 裕英さん

**～子育て応援とうきょう会議フォーラム～**  
**「子育てってカッコいいかも?」を開催します。**

**【日時】**平成20年2月2日(土曜日) 午後1時30分から4時30分  
**【会場】**江戸東京博物館ホール(JR総武線・都営大江戸線両国駅下車)  
**【内容】**◎第1部 トークショー(楽しい子育てライフ)  

[ゲスト]	葉丸 裕英さん(子育て応援とうきょう会議イメージキャラクター)
	杉山 千佳さん(とうきょう子育てねっとチーフコーディネーター)

 ◎第2部 トークセッション(若い皆さんの将来のヒントを考えよう!)  

[コーディネーター]	藤原 智子さん(読売新聞記者)
[ゲスト]	葉丸 裕英さん 安藤 哲也さん(NPOファザーリング・ジャパン代表理事) 他、学生さんや子育て中のお父さんお母さん等を予定

**【参加申込方法】**  
住所・氏名・職業・年齢・電話番号を記入し、FAX・はがき・電子メールで下記までお申込みください(応募多数の場合は抽選)。託児(1～5歳)・手話通訳・車いす席の希望があれば記載してください。平成20年1月23日(受領・消印有効)

**マスコットキャラクター・キャッチコピー募集**

【社会全体で子育てを応援する!というメッセージを込めて応募ください。選ばれたマスコットキャラクターとキャッチコピーを募集します。】

<p>★マスコットキャラクター部門</p> <p>最優秀賞(採用作品)/賞金15万円と賞状 優秀賞3点/賞金1万円 ネーミング(採用作品)/賞金2万円</p>	<p>★キャッチコピー部門</p> <p>最優秀賞(採用作品)/賞金3万円と賞状 優秀賞2点/賞金1万円</p>
---	--

【応募方法】お情報はホームページからの募りを受け付けます。東京都福祉保健局少子社会対策部計画課ホームページより応募詳細をダウンロードし、応募申込書に記入の上、作品に添付して郵送にて応募。(キャッチコピー部門は、はがき・FAXの応募も可)平成20年2月12日(受領・消印有効)

※採用者には、イメージキャラクター提供さんの名義で応募を承認いたします。

〒163-8001(郵便番号と宛先だけで構いません。)

申込み  
応募先

東京都福祉保健局少子社会対策部計画課内 子育て応援とうきょう会議事務局

「とうきょう会議フォーラム参加者募集」係及び「とうきょう会議公募」係まで

電話03-5320-4115 FAX03-5388-1406 電子メール0000194@section.metro.tokyo.jp  
ホームページアドレス <http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/joho/eeshiki/syoushi/syoushi/index.html>

～子育て応援とうきょう会議フォーラム～  
子育てってカッコいいかも？

日 時 2008年2月2日(土)  
13時30分～16時30分  
場 所 江戸東京博物館ホール

## プログラム

## トークショー

(ゲスト) 子育て応援とうきょう会議イメージキャラクター 薬丸 裕英 氏  
(聞き手) とうきょう子育てねっとチーフコーディネーター 杉山 千佳 氏

## トークセッション

(コーディネーター) 読売新聞東京本社生活情報部記者 榊原 智子 氏  
(ゲスト) NPO 法人ファザーリング・ジャパン代表理事 安藤 哲也 氏  
子育て応援とうきょう会議イメージキャラクター 薬丸 裕英 氏  
(一般登壇者) 東京学芸大学教育学部4年 酒井 玲奈 さん  
上智大学総合人間科学部3年 高橋 杏子 さん  
法政大学キャリアデザイン学部3年 中島 繁樹 さん  
子育て真っ最中のお母さん 横田 友美 さん  
株式会社絵本ナビ勤務・子育て真っ最中のお父さん 篠 淳一郎 さん  
日本電気株式会社勤務・社会人4年目 原田 大志 さん

## 補足資料

- |   |                            |    |
|---|----------------------------|----|
| 1 | 子育て応援とうきょう会議フォーラム 開会挨拶     | 11 |
| 2 | 子育て応援とうきょう会議フォーラム トークショー   | 13 |
| 3 | 子育て応援とうきょう会議フォーラム トークセッション | 25 |
| 4 | アンケート結果                    | 57 |

## 開 会 あ い さ つ



東京都副知事 やまくち かずひさ  
山口 一久

皆さん、こんにちは。本日は、子育て応援とうきょう会議のフォーラムにお越しいただき、ありがとうございます。このフォーラムを開催する目的などについて少しお話をさせていただきます。

我が国は、平成17年に初めて総人口が減っていく「人口減少社会」を迎えました。特に東京都では、女性の1人平均の子どもの数は1.02と極めて低くなっており、少子化が進むと働く人が減り、社会保障制度や国全体の社会経済に大きな影響を与えていくことが心配されています。

少子化の背景には、核家族化などで、周りに子育てを助けてくれる人がおらず、子育てに関する負担感が増えていること、仕事か出産・育児かを選ばなければならない状況になっていることなど、さまざまな原因があると考えられています。結婚や出産は価値観や人生観にかかわるもので、社会が強制するものではありません。しかし、社会が少子化への対策を求めている現在、子どもを産み育てたいと望む人たちが、安心して子育てをし、子どもたちを健やかに育てられる環境を整備することは、社会全体が取り組まなければならない大きな課題です。

これまで、保育所が足りず、働きたくても子どもを預けることができないということが問題となってきましたが、国には認可保育所という制度しかありませんでした。

そこで、東京都は、0歳児保育や時間外保育などの大都市の保育ニーズに対応しようということで、新たに「認証保育所」をつくるなど、利用者の視点に立った子育て対策に積極的に取り組んでまいりました。

さらに、昨年末には、「子育て応援都市東京・重点戦略」を打ち出しました。これは、福祉保健・医療・教育・労働・まちづくりなど各分野において、「社会全体で子育てを支援する」体制を強化していこうというものです。

今後、「子育てと仕事が両立できる雇用環境を整備」すること、「保育所の待機児童を解消」すること、「社会全体で子育てを温かく見守り、支援」することを目標として、取り組んでいきます。

例えば、育児休業取得者の代わりに社員を雇用する経費を会社に助成することや、マンションなどに併設する保育所や企業内保育所の整備を行っていきます。

また、子ども連れの方が気軽に外出できるよう、授乳やおむつ替えなどができるスペースを、都立公園や保育所、公共施設など、身近な地域に、今後3年間で600カ所設置していきますし、ベビーカーのま

ま乗れるノンステップバスの整備なども進めてまいります。

東京都は、こうした取組を着実に進めてまいります。行政だけでは限界があります。例えば、長時間労働を改善し子育てと仕事の両立を実現するには、企業を取組や仕事についての意識を変えていかなければなりません。

このため、昨年10月、企業・大学・NPO・マスコミなど幅広い分野の団体で構成する「子育て応援とうきょう会議」を設置しました。この会議の活動を通じて、子育てを応援するさまざまな情報やメッセージを発信し、子育て支援の機運を盛り上げていきたいと思っています。

また、この会議の活動を応援していただくため、タレントの薬丸裕英さんをイメージキャラクターとしてお迎えしました。薬丸さんは、4人のお子さんをお持ちで、ご多忙の中、家事・育児にも積極的に関わっていらっしゃるということです。本日もご自身の子育ての楽しさや苦労話をご紹介いただけることを楽しみにしております。

少子化の進行は直ちに解消できるものとは思いませんが、社会全体の継続的な取組があれば、確実に実を結び、子育て応援都市東京が実現できるものと信じております。

本日のフォーラムは、「とうきょう会議」の活動の第1歩です。これをきっかけに皆様とともに子育てを応援する東京を実現していきたいと思っておりますので、ご協力をよろしく願いいたします。本日は楽しくお過ごしください。



## 第一部 トークショー

### <ゲスト>

#### 子育て応援とうきょう会議イメージキャラクター<sup>やくまる ひろひで</sup>薬丸 裕英 氏

1966年生まれ、東京都出身。  
1981年、TBS「2年B組仙八先生」に出演、翌年5月5日「NAINAI16」でシブがき隊としてデビュー。その後7年間、数々の実績を残し1988年解隊、ソロになってからは、数多くのドラマ、バラエティー、コマーシャルなどに、俳優・タレントとして幅広く活躍中。  
家族は、妻と子ども4人。3男（高校2年生、中学2年生、小学2年生）、1女（小学5年生）の父として家事・育児にも積極的に関わっている。



### <聞き手>

#### とうきょう子育てねっとチーフコーディネーター<sup>すぎやま ちか</sup>杉山 千佳 氏

京都府立大学卒業。全国と東京都を視野において、子育て支援NPOの中間支援を行う団体で活躍。著書「子育て支援でシャカイが変わる」(日本評論社)他。内閣府「子どもと家族を応援する日本」重点戦略検討会議委員。

【杉山】 よろしくお願ひします。とても緊張しておりました。(笑)

私は、もともとが育児雑誌のライターをしておりましたので、こういったフォーラムの裏方をすることは多かったんですね。そのときは、ここはプロの方がお座りになることが多いものですから、本当にどうしましょうという形で、今日を迎えてしまいました。いろいろ不手際があるかと思うんですけども、ぜひフォローをよろしくお願ひいたします。

【薬丸】 こちらこそよろしくお願ひします。

【杉山】 私は、1965年生まれで、多分、薬丸さんのひとつ年上だと思うんです。それこそ地元は福井県だったんですけども、ブラウン管の向こうの薬丸さんのご活躍は、もうずっとウォッチングさせていただいております。

【薬丸】 ありがとうございます。

【杉山】 ご存じの方がとても多いと思うんですけども、「はなまるマーケット」でもご活躍ということですね。また、ご案内にもあったように、高校2年生と、中学2年生、小学2年生の3人の男の子と、それから小学5年生の女の子のお父さんでもいらっしゃる。今日は、そのあたりの子育てのお話などをお伺いしたいと思っております。

4人のお子さんがいらっしゃるということで、今も楽屋で第2部のトークセッションの方たちともお話しさせていただいたんですが、「4人ってすごいね」というお話があって、やはり子育てって大変だっているいろいろ言われていますが、子育ての大変さ、しかも4人というあたり、薬丸さんはどのようにお考えというか、お感じになっていらっしゃると思いますか？



【薬丸】 僕はあまり大変だとは思っていないんですけども……。

【杉山】 全然？むしろ楽しい？

【薬丸】 楽しんで子育てをやっています。やはり、それは生活の上でいろいろ、ないと言ったらうそになりますけれども、でも自分が望んでいたことなので。

僕は幼少のころ、両親が共働きで、家に帰ってもあまり温かい家庭ではなかったんですね。だから、そういうのが何か大人になって自分が反面教師的に、もっと明るい楽しい家庭を築けたらなというふうに思っていて、やはり大家族っていいなって、ずっと思っていましたので。

僕なんか子どもころは、「てんとう虫の歌」っていうアニメがありまして……。

【杉山】 7人のきょうだいでしたか？

【薬丸】 そうです。ものすごく画面を通して、ああ、こういう家族ってうらやましいなっていう、両親がいなくても、みんな協力して、日々楽しく生活しているというところにすごく共感を覚えまして、子どもながらに、大人になったらこういう子どもたちを育てられたらいいなと思っていたので。それから、うちは両親が共働きでして、家に帰ってもだれもおらず、近所のお肉屋さんに僕は育てていただいたようなものなんですね。そのお肉屋さんに小さいお子さんがいたんですよ。自営業ですから、ご主人と奥様はお店に出てお仕事をされていて、子どものときに、子ども、赤ちゃんを僕が面倒見ていたんですね。おむつを取りかえたり、ミルクを飲ませたりとか、そういうことが全然苦じゃなく好きな子どもだったんですよ。だから、そこからずっと今までに至っていますので、子育てをするということに関しては、全く僕は苦に思っていないんですよ。

【杉山】 例えば、今、高校生で、中学生で小学5年生、2年生となると、関わるときの会話というか、高校2年生を相手に、こういう話をしなくちゃとか、そういうような少し相手を見ながら対応していかなければいけない部分というのもあるかなと思うんですけども、わりと自然にできちゃうんですか。

【薬丸】 自分の意識の中では、柔軟に相對しているつもりでいますけれども。それが子どもの目線から見て、父親がそういうふうに相對していると受け取ってくれているかどうかはちょっとわからないんですが、個々に時間をとって、何かがあったときには1人1人会話をするようにしています。

【杉山】 ご本を読ませていただいたときに、一番上のお兄ちゃんは、僕と違うというか、わりと論理的というか、プラネタリウムに行って、ずっと星を見るのが大好きだったりという、ちょっとそういうタイプなんだというようなことを書いてあったかと思うんですけども。やはり、きょうだいによっても違うじゃないですか。そこは「何で違うんだ」というよりは、どちらかというとおもしろいなというふうに見ることができるんですか？

【薬丸】 でも、自分の思考回路を、大体こういうタイプの人だなとか、こういうタイプの子もだなという、自分が今まで、この41年間生きてきた中で接してきた人、子どもの中の、こういうタイプだなという区分けを自分の中でして、こういう人、こういう子にはこうやって話をすればいいやというような感じで話をしているつもりなんですけれども。そんなに人生経験が豊富でないですから、だから、自分のチ

ヨイスが合っているかどうか分からないんですけども。

おもしろいもので、長男は、小さいころはプラネタリウムとか、星を見て、「こうだね」とか「ああだね」ということを言っていたんですけども、学校に行ったり、友達、それから世間というものを自分で見て、肌で感じて、いろいろ変わっていった部分もあります。そういう意味では、長男は今まで自分が相対した人の中にないタイプなんです



ね。会話をしているにもかかわらず、別に苦労はしていないんですけども、「ああ、こういう考え方なんだ」という何か再発見はありますね。

【杉山】 例えば、こういう生き方をしてほしいとか、長男に限らず、ですけども、子どもってこうだろうとか、こっちに行ったらいいんじゃないかとかというような、そういったわりと父親っぽいというか、強く出て行く感じなんですか、それとも本人の意思に任せてという感じですか。

【薬丸】 そうですね、長男が小学校高学年くらいまでは、もちろん手を上げたこともありましたが、声を荒げたこともありましたが。中学校くらいからですかね。やはり会話というものを重視するようになりましたね。

ただ、1つだけ、うちの子どもたちが成長する過程の中で、僕も1人の男として、この世に生を授かって歩んできた道がありますから、大体男の子の歩んできた道というのはわかるつもりだったんです。今でもわかっているつもりなんですけれども。

自分は芸能人として生活させていただいていますけれども、芸能人の子どもというのを経験したことがなかったので、そこに対してはすごく自分の中でちょっと戸惑いがありましたね。

あるとき、長男と会話をしているときに、いろいろ理論武装して、自分では言ったつもりなんですけれども、「でも、お父さんは芸能人の子どもの気持ちはわからないだろう」と言われたときに、ちょっとぐささと来ましたね。

これだけテレビに出させていただいたりしていると、買い物に行っても、公園に遊びに行っても、旅行に行っても、声をかけてくださる方ってたくさんいらっしゃるんですよ。それは、僕なんかにとってはとてもありがたいことなんですけれども、一緒にいる子どもにとっては、それが時にはありがたいことではないこともあるんですよ。一緒に楽しんで遊んでいるときに、「写真を撮ってください」とか「握手してください」とか声をかけていただいたときに、子どもって、なぜかすごくモチベーションが下がるんですね。だから、「一緒に遊ぼう」と言っても、「もういい」と言うんですよ。

【杉山】 それはちょっと残念ですよ。

【薬丸】 何なんですか。やはり一緒に遊んでいる時間を大切にしたいと思っていたのか、それを途中で寸断されたような気になるんですかね。僕もそこら辺はちょっとよくわからないんですけども。

【杉山】 多分、僕が主役で、パパと遊んでいるときに、取られちゃうみたいなの……。

【薬丸】 感覚なのかもしれませんね。

【杉山】 そういうものかもしれないですね。そのときに、例えば、「今日はプライベートだから」って本当は言いたいんだけど、そうすると、また尾ひれがついて、「薬丸さんって」とか言われちゃうから。

【薬丸】 そうですね。そういう面では、ちゃんと「ありがとうございます」って言って、写真を一緒にお撮りしたりサインをしたりということはあるんですけど、その子どもの意識というのは、ちょっとわからなかったんですね。今でもわからないです。だから、珍しい名字ですし、僕は本名なので、もちろん学校に行っても、学生証を見せても、子どもたちも、「薬丸」というのを見せるわけですよ。そうすると、必ず「あれ、やっくんと関係あるの？」って聞かれるんですって。そうしたときに、「いいえ」って答えるらしんですよ。別に恥ずかしい仕事をしているわけじゃないし、「子どもだよ」って言えばいいじゃないかって言うんだけど、子どもは、ちょっと抵抗があるみたいですね。何かしたらば、やっぱり父親に迷惑がかかるんじゃないかと。時には羽をつけて羽ばたきたいと思っていることもあるらしいんですよ。普通のサラリーマンの方でしたら、子どもがおいたをしても、そんなに世間的には知られることはないかもしれないですけども、僕の子供というだけで、いろいろメディアにも取り上げられたりするわけじゃないですか。ですから、何かそういうところでも、目に見えない、呪縛まではいかないと思いますけれども、何かプレッシャーみたいなものは子どもながらに持っているみたいですね。

【杉山】 できるだけ仕事の雰囲気みたいなことを家庭の中に入れないようにという気遣いのようなことというのはしていて、もう家庭は家庭だからという、おうちの中では、本当に親子関係を大事にしたいというふうに思っているらしいですね。

【薬丸】 そうですね。芸能界の方でも、いろいろな方がいらして、タイプ分けされると思うんですね。「はなまるマーケット」の1コーナーに、「はなまるカフェ」というコーナーがありまして、ゲストをお招きして近況、そしてご家族のこととかをお伺いするんですけども、前もって家族の話はしたくないと言われる方もいらっしゃるんですよ。それは、仕事と家庭は別だと考えているので、家庭の雰囲気を見せたくないから、そこには触れないでくださいという。それはそれで僕は、「わかりました」と。なぜならば、自分もそうだったんですよ。アイドルとしてデビューして、アイドルが終わって、それから結婚したときに、すぐにアイドルという余韻を自分の体の中で消せなかったんですよ。

【杉山】 今でも十分アイドルだと思うんですけど。(笑)

【薬丸】 いえ、もう「オジサンズ11」ですから。だから、そういうときに自分は家庭のおいを見せないというように、家庭に関するお仕事とか、子どもに関する取材とか、そういうことを結婚した後もしばらくはお断りしていた時期があったんです。でも、世間の方が抱いてくださるイメージというのは、やっぱり結婚して子どもがいる。当時は「パパドル」と僕は言われていたんですけども、アイドルがパパになったから一応「パパドル」。もう、その冠がすごく嫌だったんですね。パパドルっていうことに何かアレルギー反応がありまして、だから全く家庭のおいを見せなかったんですけども、そうすると、やはり使い手側と使っていただく側の仕事のイメージのギャップみたいなものが出てきてしまって、オファー

というのが本当にどんどんと減っていったんですよ。自分は当時、トレンドードラマとかがはやっていたので、そういうドラマに出て、まだアイドルという余韻を引きずりながらやっていきたいと思ったんですけども、ドラマの制作側というのは全くそういうイメージはなかったんです。もうあなたはお子さんがいるアイドルですよ。そういうことですごく空気感が違うなということを感じました。



そうしたときに、仕事が減って行って、自分はどういう位置づけで仕事をしていけばいいのかなという、戸惑いがあった時期もあったんですよ。そういうときに、家に帰って、リビングで子どもと妻がものすごくいい笑顔でテレビを見ていたんですよ。その笑顔を見たときに、自分は一家の主として、この笑顔をずっと続けさせてあげなければいけないんだなと。自分が、仕事がなくなって、生活がちょっと厳しくなったときには、この笑顔が続けられないんじゃないかというふうに思って、何を变なイメージに執着しているのかなということで吹っ切って、結構家庭のこととかをテレビとかでしゃべるようになって。そうしたら、それを見ていたTBSのプロデューサーが、アイドル上がりのくせに生活感があって、こいつおもしろいなというふうに最初思ってくださいなんですって。「はなまるマーケット」という番組に、それで起用してみたら、何となく、ありがたいことに、もう今年で12年になるんですけど.....。

【杉山】 おめでとうございます。

【薬丸】 ありがとうございます。干支で言ったら一回りですよ。12年間も続いてしまったということですね。だから、もう何か芸能界ということで、ある種ガラス張りのところもありますので、プライベートもお仕事もないという、だからそれはもう全部出していこうかなというふうに自分の中では、イメージも変わって。それを子どもにも伝えたんですよ。妻はもともと芸能界というところで仕事をしていたから、それに関してはすぐ納得してもらえました。やはり上の長男や次男はちょっと戸惑っていた部分がありますけれども.....。下はまだわかっていないですね。長女と三男は。

【杉山】 そういう難しいお立場の芸能人の方に伺う、突っ込んだ質問になるんですけども、家庭のことなんですが、ご夫婦で子育てをされていて、奥様、ここはすごいなとか、ここはかなわないなというような、尊敬しているような面というのはどういうところにありますか？

【薬丸】 いや、もう、それは家庭を守ってくれているということと、子育てに関しては、本当に僕はエキスパートだと思っています。もう専門家じゃないかというくらい。

【杉山】 子どもたちの気持ちを察しながら、さりげなく何かやってあげるとか.....。

【薬丸】 それは人間ですから、時には感情に任せて叱ることもあります。ありますけれども、僕は常に言っているのは、怒ってもいいと。悪いことをしたんだから正すことはね。正してもいいけれども、その後のアフターケアというものが大事だから、翌日に引きずらないように、怒った後に、なぜこういうことがいけなかったのかということは伝えるべきだということは妻に言っているんですけどね。自分にもそれ

は命じて。

【杉山】 時間的なものというのは、一般のサラリーマンの方ともまた違うシフトだと思うんですが、それこそ「はなまる」の生放送があるので、多分朝も早くおうちを出られたり……。

【薬丸】 そうですね。ですから、平日、朝食を一緒にとるといったことはないです。子どもたちは、そろそろ起きるかなというぐらい。

【杉山】 日によってはお昼にお帰りになっていっちゃったりということもあるんでしょうか。

【薬丸】 昼に帰ることはまずないですね。

【杉山】 お忙しいですね。土・日というのはあるんですか。

【薬丸】 土曜日、日曜日は、日曜日がレギュラー撮りの仕事があったりするんですけども、土曜日は比較的……。

【杉山】 では、1日オフというか、そういう形でいられるのは？

【薬丸】 月に2日ぐらいですね。

【杉山】 学校の行事とか卒業式だとか、授業参観とかというのも……。

【薬丸】 できるだけ参加できるときはするようにしていますし、前もって事務所のほうに伝えて、融通してもらえる面があるときはしていただいていますけど、極力僕は、100%と言ったらうそになりますけれども、90%近い数字では学校行事には参加しています。

【杉山】 それはとても優秀ですね。

【薬丸】 この間も、娘が歌の会があったんです。それからリコーダーを発表する会があって、何とか仕事の合間にそこだけ抜けて、三脚立てて、ビデオだけ撮って、撮ったら「お疲れさま」って帰っていくみたいな。

【杉山】 それを「後で見ようね」という……。

【薬丸】 本当に頻繁に見るかといったら、そんなに見ないんですけどね。ものすごく一生懸命僕はVTRを回しているんですけど、撮ったすぐ後に家族と見て、「ああだったね、こうだったね」って言うぐらいで、その後はあまり見ないでストックだけ増えていくんですけどね。

【杉山】 写真の数はきょうだいによって、長男が多くてとか……。

【薬丸】 それはもう申し訳ないんですけど、長男のときは異常に多いですね。それから娘のときですね。そういう意味で一番貧乏くじを引いているのは三男ですね。ほとんど写真がないです。

【杉山】 1人の写真もないとか、きょうだいみんなで撮っていてとか。

【薬丸】 ないですね。でも、今、三男と僕は、すごくサッカーに熱中しているので、すこし時間があると、ボール蹴りをしたり…、そうやってコミュニケーションを図っていますけど、写真ということになると、多分今後は謝らなければいけないのかなという。VTRは結構残っていますけどね。

【杉山】 先ほど、芸能人で子育てするのは難しい部分が多いというお話もあったかと思うんですが、逆に、この子のほうが得かな？というか、それこそサッカーがお好きなお子さんだったりすると、ちょっと

選手がいらっしゃるようなときに、そういうのってあるんでしょうか？

【薬丸】 それで得というのではないですけど、友達がやはり芸能人だったりスポーツ選手だったりするので、うちでホームパーティーとかするときには、そういう人が家に来てくれるわけじゃないですか。でも、不思議な感覚だなと思ったんですけど、子どもが幼稚園のときなんですけど、同級生の子と話しているときに、「何で何々君のお父さんはテレビに出ていないの？」って。うちに来る人たちはみんなテレビで見る人だから、全員がテレビに出ているものだと思っていたらしいんですね。これ、ちょっとおもしろい感覚だなと思って。うちの子は、月日を重ねて、その辺は、いろいろな職業があって、何々君のお父さんはどこどこで働いているんだねというふうに分かったようなところがあるんですけどね。

【杉山】 子どもたちなりにいろいろなことを聞きながら成長していくということなんでしょうね。

【薬丸】 そうですね。芸能人だから得ということはあまり……。

【杉山】 職場の同僚みたいな感じですよ。

【薬丸】 そうですね。でも、妻は、芸能界という特殊な世界にいて。周りがいろいろしてくれるんですよ。事務所の方とか、マネージャーさんとか、ヘアメイクさんとか、スタイリストさんとか。そういう方が周りの世話をしてくれるので、僕もお話をさせていただいて分かったんですけど、家庭に入ったときに、あまり家庭のことがすぐにはできない芸能人の方って多いんです。でも、うちの妻は、結婚してから、すんなりと入れたんですよ。4人育てながら。僕も今回、すごく妻に対して感謝しなきゃいけないと再認識したのは、うちの娘が先週末に溶連菌という病気になって、治ったかなと思ったら、今度インフルエンザにかかってしまったんですよ。世間でいろいろ取り上げられたタミフルという薬を処方することによってどうなんだと、お医者さんに僕もちょっと話に行って、でも飲ませようと。うちではそういうことになって、娘にタミフルを飲ませて、でも異常行動があったらいけないのでということで、妻がずっと部屋で2人きりで娘を、ある意味隔離して付き添っていたんですよ。それで娘はよくなったんですけども、4日ぐらい前にちょっと妻がおかしくなって……。

高熱は出たんですけども、その後は下がったので、インフルエンザではなかったんですけども、もう全く起き上がれないという状況で、しかも、うちがちょっと両親も離れていますし、彼女のお母さんも名古屋ですので、別にお手伝いさんとかもいるわけではなく、すべて彼女が1人でやってくれていたの、この彼女というものがストップしてしまったときに家の中が全く機能しなくなるんですね。これはもう僕もびっくりしましてね。

【杉山】 たまにはね、奥さんもそうやって寝たほうがいいんじゃないかと思えますけど。(笑)

【薬丸】 いや、本当、ご主人は1回それを経験されたほうがいいですね。どれぐらい主婦の人が大変かというのが身をもってわかるというのが。

僕も仕事が終わって、夜中に帰ったら、どうも調子が悪いと。もう起きられないんですね。これはだめだなと。でも、木曜日の朝に子どもたちのお弁当をつくらなければいけないんですよ。

【杉山】 お弁当からですね。

【薬丸】 それで夜中に、24時間やっているスーパーに買い出しに行きまして、なれない夫が、これだったら使えるかなみたいなお弁当の商品をかごに入れて……。そうやってお弁当づくりから、その日に帰ってお弁当の商品を買って、それからたまった洗濯物を洗濯して、家の中に干して、一応それで次の日につくる弁当のプランですね。

【杉山】 プラン？

【薬丸】 チラシの裏に、ここにミートボールを入れて、ここにブロッコリを入れてとか、自分でプランニングをして、もう前もってできることはやっておこうと思って、ブロッコリをゆでたりしながらプランを考えていたら、ブロッコリをゆで過ぎちゃって、ふにゃふにゃになって使えなくなっちゃったんですよ。そういう七転八倒しながら、次の日は娘と三男のお弁当をつくって、もう長男と次男は学食で食べてくれとお願いをして、それで朝だけオムレツをつくって、「はなまる」に僕は行ったんです。

【杉山】 じゃあ、そのオムレツは「君らが食べなよ」というオムレツ？

【薬丸】 そうです。レンジでチンして。細かいことですがけれども、チーズオムレツと納豆オムレツをつくって置いていったんです。(笑)「好きなほうを食べなさい」みたいな、手紙で書いて。それで行って、また仕事が終わって帰ってきたらば、すごいんですよ。

【杉山】 家の中が？

【薬丸】 次男、三男はサッカーをやっていますから。普段着ていく洋服とサッカーの洋服と、それからバスタオルとか……。

【杉山】 ちょっと泥がついたみたいな？

【薬丸】 いや、お風呂上がりにふく(タオル)。足ふきとかを入れると、2回、3回くらい洗濯機を回さなければいけないんです。洗濯機を回したまま洗濯機にそのまま放置しておくとか、やっぱりこれはカビの原因になるんじゃないかとか余計な心配をしたりして寝られないんですよ。そうすると、全部洗濯が終わって、干すまで、終わって何となく就寝かなと。そうしたら、時計を見たら、もう3時だったんです。

【杉山】 もう起きなきゃいけないんじゃないですか。お弁当をつくらないといけない。

【薬丸】 それでまた仮眠をして、お弁当をつくって「はなまる」に行ったんですけどね。今朝も、朝食をつくって、1回洗濯機を回して、それから出てきました。

【杉山】 私よりすごいです。

【薬丸】 いやー、でもね。僕、岡江久美子さんが一緒に「はなまる」をやっているときに、朝5時前に起きて、お嬢さんのお弁当をつくってからいつも来ているのよって言っていたんですけど、すごいなっていう感覚でしかなかったんですけど、自分が体験すると、「すごい」じゃないですね。かなりすごいなと思いました。もちろん主婦の方ですから、年月を経て、段取りとかというのは身についていると思いますけれど……。これをやってから、朝来て、「はなまるマーケット」を一緒にやっていたんだと思うと尊敬しますよね。

【杉山】 どうですか、奥様って、そういうときに、「私の大変さがわかった？」みたいな、そういう感じ



になるのか、「ごめんね」という感じ....。

【薬丸】 最初、Aパターンですね。「私の大変さがわかった？」と言われると、それは旦那さんも、分かっているけどカチンと来るものなんですよ。やっぱり。

【杉山】 言っちゃうタイプ.....。

【薬丸】 それは絶対口にしてはいけませんね。

【杉山】 はい、わかりました。

【薬丸】 うちの妻は、一応そこら辺を、Aパターン、Bパターン、どっちを出そうかなって



考えていたか考えていないかわからないんですけど、一応「ごめんね」って言われて、「大変だったでしょう」と言われると、「いや、そんなことはないよ」って、またやろうかなと思うんですよ。結構お調子者なので。

【杉山】 分かりました。これからはそうします。

【薬丸】 おだてられると木に登るほうなので。だから、自分がやってみて、本当に大変さが分かったのと、でも、それで何かまたいろいろ自分の中で、料理とかのバリエーションが広がるのかなというような感じも受けて、やってみるとできるんですよ。

【杉山】 逆におもしろかったりとか、それこそお弁当のレイアウトをどうしようかなとか。

【薬丸】 きのう帰ってきたときに、三男がすべてお弁当箱が空だったんです。昨日は、ものすごくうれしかったんです。でも、木曜日はちょっと残っていたんですよ。

【杉山】 ちょっと悔しい、悲しいみたいな？

【薬丸】 なぜかという、僕も焦っていたし、段取りがわからないので、今小さいグラタンとかも小分けにしてレンジにかけられるものがあるんですよ。それがどうも解凍されていなかったみたいなんです。(笑)

【杉山】 それはいけないですね。それはちょっと食べられないですね。

【薬丸】 そうですよ。これはちょっと失敗だったなと。でも、一応トライはしたんだなと思って、申しわけなかったなというような気分でいっぱいだったんですけどね。でも、やっぱりそうやって全部食べてきてくれると、すごくうれしいので、また作りたいなという自分の中でも励みになりますし、いろいろな分野に挑戦していけるなど。木曜日は、夜御飯をつくるのに、本当に何をしていたか分からなかったの、もう鍋にしちゃったんですね。鍋は手軽じゃないですか。それで2日続けて鍋はなあと思って、一応子どもに聞いたんです。「何食べたい？」って言ったら、ミートソースが食べたいと言うんです。「おっと来たな」と。自分には未知の分野ですから、ミートソースって作ったことがなかったので、でも、昨日の夜帰ってから、タマネギを炒めて、挽肉を炒めて、それからホールトマトを入れて、いろいろ試してみた



んですよ。そうしたら意外に奇跡的においしくできたんですよ。そうしたら、それも全部残さず食べてくれて、今日の朝もミートソースを食べてくれたわけです。だから、今日は朝作らなくてよかったので、1食ちょっと手間が省けて、ありがたかったんですけどね。

【杉山】 よかったですね。奥様は、ちょっとはお元気になられましたか？

【薬丸】 まだ、かなり咳こんでいて。

【杉山】 お大事にしてください。

【薬丸】 伝えておきます。

【杉山】 病院は行かれたんでしょうか。

【薬丸】 うちの妻は、あまり薬を飲んで治すというタイプじゃないんです。僕は、名字が薬丸というだけに薬をすぐ飲むんですけども、妻は本当に飲まないんですよ。自然と闘って治すという。だから、治りもちょっと遅いのもかもしれないんですけどね。

【杉山】 奥様を皆さんご存じだと思うんですけども、私たちがテレビでいつも見ていた石川秀美さんで、これだけ家庭を大事にされる薬丸さんなので、なかなか秀美さんをテレビで見る機会とか雑誌で見る機会がないんですが、例えば、お戻りになるとか、そういうご予定とか、それはないんですか。

【薬丸】 いや、ゼロではないと思います。ゼロではないんですけども、我々が結婚するときに約束したことがあります。それは、先ほどもちらっとお話ししましたけれども、僕が本当に幼稚園や小学校から家に帰ったときに、「ただいま」って言っても、「ただいま」という自分の声が響いて返ってくるだけだったんです。だれも「おかえり」って言ってくれる人がいなかったんです。それは子どもながらに、ものすごく僕は寂しく悲しくて、自分が結婚して子どもが生まれたらば、やっぱり「おかえり」っていう言葉をかける人が家にいなければいけないなと思ったので、幸いうちは、まだ共働きでなくても、妻が家にも生活していけているので、そのときぐらいは妻には家にいてほしいなとずっと思っていたんですね。それを結婚のときの約束として、子どもが大きくなるまでは子育てというものを2人で楽しもうという約束はしたので。だからそれを忠実に守ってくれていると思うんですけども、それで子どもたちが大きくなったら、自分の時間がとれば、もしかしたら復帰ということもあるかもしれないんですけども、もう、でも自分の中では、そういう復帰という選択肢はないようなことを言っていましたけどね。

【杉山】 そうですか。ちょっと残念なような、何か見てみたいというか.....。

【薬丸】 そうですね。でも、子どものためには、やっぱり「おかえり」っていう一言が、日々生活していると、それが当たり前なことなんですけどね。子どもがありがたく思っているかどうか分からないんですけども、でもやっぱり、お母さんが、帰ってきて「おかえり」と一言かけてあげることによって、いろいろな外で、学校であったこととかも、すべてお母さんの「おかえり」が解きほぐしてくれるんじゃないかなと僕は思っているんですよ。

【杉山】 でも、多分、「はなまる」とかでご一緒される、子育てしながら、岡江さんもそうだと思うんですけども、そういったタレントさんってたくさんいらっしゃるって、そういう方はそういう方で生き方と

して尊重していらっしゃるんですね。

【薬丸】 もちろんです。それはそれで、でも岡江さんも極力、仕事がないときは、仕事を入れなくて、お子さんと接するというふうにおっしゃってましたし、小さいころは、かなりセーブされていたと言っていましたね。それと、お母様が近くにお住まいだったので、そちらにお子さんが帰ればいいという安心感もあったと思うんですけど、うちはちょっと離れていますので。

【杉山】 本当に何かお子さんを大事にされていらっしゃるんだなということをしみじみと伺えました。そろそろ時間も迫ってきているんですけども、実はこの場所が、東京都の主催の会じゃないですか。それで、イメージキャラクターを、どうして薬丸さんは引き受けられたのかしらって。東京都のために一肌脱ごうかなとか思われたのかなと……。

【薬丸】 そうですね。現実として、本当に少子高齢化と言われてはいますけれども、東京都の合計特殊出生率が1前後になったということですよ。これはやっぱり、将来的に、日本、地球レベルで大変だと思うんです。だから、ここで何とか歯どめをかけなければいけないなと。テレビに出て、お仕事をさせていただきますし、自分に伝えられることがあるのであれば、それはもうお伝えすることは喜んでさせていただきますということと、やはり自分も、子育てをしながら、いろいろ不便を感じる人が多いんですね。そこがちょっとクリアになればというような……。

【杉山】 では、東京都への要望も加えて、ちょっと不便に感じていらっしゃる部分というのは？

【薬丸】 お仕事をされている方々が、うちは妻が家にいて、子どもを見られるからいいですけども、そうやって見れない方々もいらっしゃると思うんです。それが区なのか都なのか市なのかかわからないんですけども、そこで安心して預けられる場所を、税金等でいろいろ賄っていただいたりできないかなと。そこには預けっぱなしで遊んじゃう、もしかしたら心ないお母さん方もいらっしゃるかもしれないんですけども、そういうことを言っていたら、何事も始まらないと思うんです。だから、そういう場をちょっと提供していただきたいというふうにも思いますし、もっと子どもとかお年寄りを大切にするような店作りとか、そういうことも力を注いでほしいなと、企業の方にも思いますね。

この間も次男と三男と、次男のサッカーの試合があつて、ちょっと夜遅くなってしまったので、「今日は食べて帰るよ」と言って、ファミリーレストランに3人で入ったんです。そうしたら、すごい待ち時間になって、喫煙席のほうだったらすぐ入れますと。それでもう次の日の学校もあるしということで、喫煙のほうに入ってしまったんですけども、そこで食事をしていると、ものすごいんですね。その煙とか。あとやっぱり、食べていてもおいしくないし、でも、愛煙家の方は喫煙場所も欲しいんじゃないかなと思うので、もうちょっといろいろな形で工夫はできないかなという……。

【杉山】 そうですね。もうちょっと禁煙コーナーを増やすとか……。

【薬丸】 そう。それから、お子様とかお年寄りがいるときは、電車にはあるわけじゃないですか。優先席というのが。そういう優先シートみたいなものをちょっと作っていただけたらありがたいなとちょっと思いましたね。

【杉山】 今、私たちは、東京都内の子育て支援をやっていらっしゃる人たちとネットワークをつくっているんですね。それで地域の子育て情報などを、そういったファミレスのレジの隣とかにマップみたいにして置いたりとか、掲示板で、この地域にはこういう公園がありますよとか、こういう遊び場がありますよというのがご紹介できたらいい



いね、なんていう話もしているんですけど、そうやって、ここの地域とか、このお店は、子育てを応援しているんだというふうに見てもらえるというか、伝わるような環境づくりというのが進むといいなと思いますね。

【薬丸】 そうですね。

【杉山】 本当にいろいろと薬丸さんの貴重なお話というか、プライベートなお話もお伺いしてしまって。

【薬丸】 貴重だったかな。とりとめもない話ですみません。

【杉山】 本当にいろいろありがとうございました。

では、これで第1部のトークショーは終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

## 第二部 トークセッション

### <コーディネーター>

読売新聞東京本社生活情報部記者 <sup>さかきばら のりこ</sup> 榊原 智子 氏

三重県出身。上智大大学院修了。1988年に新聞記者となり、地方報道、政治報道などを経て1997年に出産。妊娠中も大きなお腹で国会や首相官邸での取材を続け、5か月の育児休暇後に復帰。実家の母のサポートで仕事を続けたが、『産み育てにくい社会』を実感。2年前から生活情報部で子育て支援の記事を多く手がける。内閣府少子化社会対策大綱検討会、厚生労働省社会保障審議会などの委員に就任。



### <ゲスト>

<sup>やくまる ひろひで</sup> 薬丸 裕英 氏

NPO 法人ファザーリング・ジャパン代表理事 <sup>あんどう てつや</sup> 安藤 哲也 氏

明治大学卒業、出版社に入社。30歳で書店員に鞍替え。その後bk1、NTTドコモ等を経て2004年、楽天ブックス店長に就任、2007年10月退社。2006年、楽天在籍中に父親の子育て支援・自立支援事業を展開するファザーリング・ジャパンを立上げ、代表理事に就任。子どもの通う公立小学校でPTA会長も勤める

### <一般登壇者> ひとこと紹介(パンフレットより)

酒井 玲奈さん  
東京学芸大学  
教育学部4年

大学での専門は環境教育学。卒業論文は「環境教育と子育て支援のつながり」をテーマに、市民活動や子どもに関する活動について研究しています。4月より、文具メーカーで勤務予定。就職活動中は、仕事に「自分を成長させてくれるような刺激」を求めていましたが、最近の子育て支援の勉強を通じて「働きやすさ」も大切であると実感しています。

高橋 杏子さん  
上智大学  
総合人間科学部3年

大学では体育会女子野球部に所属し、主将を務めさせていただいています。野球をすること・友達と遊ぶこと・音楽を聴くこと・歌うことが好きです。私は子育てについて、基本的には「楽しそう」とポジティブな印象を持っていて、将来私も子どもを育てたいと思っています。

中島 繁樹さん  
法政大学  
キャリアデザイン  
学部3年

私が所属する学部では、「より自分らしく生きるためには」をテーマに教育学・経営学・文化人類学からキャリア形成を進めています。また、ワークライフバランスゼミでは、女性の働き方、及び長時間労働について学んでいます。将来は、ワーク・ライフ・バランスを実現しつつ、グローバルな活躍と社会に貢献できる仕事をしたいです。

横田 友美さん  
子育て真っ最中の  
ママ

先輩ママさん達から大変だと聞いていたのですが、日々楽しく子育てを楽しんでいます。自由気ままで、振り回されていますが、勉強と思っているので、疲れるけど辛くはないです。子育てに、慣れという事はないと思いますが、再就職に向けて通信教育など、手の空いた時間にやってみたいと思う余裕が出来てきました。

篠 淳一郎さん  
株式会社絵本ナビ勤務  
子育て真っ最中のパパ

出産に立ち会い、初めてうれし涙を流しました。妻に尊敬の念が芽生え、この体験が自分の糧、夫婦関係の原点になっています。子育てを大変だという人は多いですが、「楽しい」と思っています。特に子どもの変化・成長を実感する時、子育てが楽しいと感じます。将来は、子どもに自慢してもらえる父親を目指したいと思っています。

原田 大志さん  
日本電気株式会社勤務  
社会人4年目

会社業務では、パソコン機器等をご提案する営業活動を行っております。私は営業という仕事が好きで、お客様とどのように信頼関係を築いていくかが営業活動の醍醐味であると考えております。子育てや父親像について、まだイメージが湧きませんが、いざ子どもができた時に仕事と家庭を両立するためには、会社の取組としてどうあって欲しいかについて興味があります。

【榊原】 皆さん、そろそろちょっとお疲れもたまっているかもしれませんが、引き続きのセッション、どうぞよろしくお願いいたします。コーディネーターをさせていただきます読売新聞の榊原と申します。

今日の子育て応援とうきょう会議のトークセッションは「子育てを応援できるような社会にして行こう」というような東京都の思いがあって開催されているわけなんですけれども、子育てを応援するというの一体どういうことなのか。皆さん、いろいろなところで耳にされていると思いますし、先ほどの薬丸さんのお話の中にもありましたが、日本は今、かつてないような出生率の低下、いわゆる少子化となっています。未曾有の事態というふうにマスコミではやや力を込めてというか、やや大げさと聞こえるような表現もさせてもらっているんですが、特にこの日本の中でも東京都で実は一番その事態が進んでいるということがあります。

先ほどの薬丸さんのお話の中でも、「合計特殊出生率」 女性が生涯の間に生む子どもの数ですが、それが1近く( 1)というご紹介がありましたね。1人の女性から2人以上の子どもが生まれれば、男女の2人のカップルから2人の子どもが生まれることになりますから、人口の規模、世代の大きさというのは維持できるんだけど、東京では2人のカップルから1人の子どもしか産まれていない。つまり、親の世代から子どもの世代になったときに半分の規模にどんどん縮小していく。すごいスピードで縮小再生産が始まっている。近年、人口減少が始まったというふうに言われるようになるんですが、その日本全体の少子化を実は牽引しているような状況がこの大都市東京にある。若い人たちは大学も就職先も東京首都圏にこそあるということで集まってきているのに、その東京が、出生率が一番低い。だから、東京から子育てをしやすい街に変わっていく必要があるだろうというような思いが東京都にもあり、今こうした取組が始まっているというふうに理解しています。

※1 都道府県別にみた合計特殊出生率の年次推移

都道府県	18年 順位	平成 18年	昭和 45年	50年	55年	60年	平成 2年	7年	12年	15年	16年	17年
全 国		1.32	2.13	1.91	1.75	1.76	1.54	1.42	1.36	1.29	1.29	1.26
東 京	47	1.02 (47位)	1.96 (42位)	1.63 (47位)	1.44 (47位)	1.44 (47位)	1.23 (47位)	1.11 (47位)	1.07 (47位)	1.00 (47位)	1.01 (47位)	1.00 (47位)
沖 縄	1	1.74	...	2.88	2.38	2.31	1.95	1.87	1.82	1.72	1.72	1.72
宮 崎	2	1.55	2.15	2.11	1.93	1.90	1.68	1.70	1.62	1.49	1.52	1.48
島 根	3	1.53	2.02	2.10	2.01	2.01	1.85	1.73	1.65	1.48	1.48	1.50
鳥 取	5	1.51	1.96	2.02	1.93	1.93	1.82	1.69	1.62	1.53	1.50	1.47
鹿 児 島	4	1.51	2.21	2.11	1.95	1.93	1.73	1.62	1.58	1.49	1.46	1.49
埼 玉	40	1.24	2.35	2.06	1.73	1.72	1.50	1.41	1.30	1.21	1.20	1.22
千 葉	42	1.23	2.28	2.03	1.74	1.75	1.47	1.36	1.30	1.20	1.22	1.22
神 奈 川	41	1.23	2.23	1.95	1.70	1.68	1.45	1.34	1.28	1.21	1.20	1.19
大 阪	44	1.22	2.17	1.90	1.67	1.69	1.46	1.33	1.31	1.20	1.20	1.21
奈 良	43	1.22	2.08	1.85	1.70	1.69	1.49	1.36	1.30	1.18	1.16	1.19
京 都	45	1.19	2.02	1.81	1.67	1.68	1.48	1.33	1.28	1.15	1.14	1.18
北 海 道	46	1.18	1.93	1.82	1.64	1.61	1.43	1.31	1.23	1.20	1.19	1.15

注：全国値は母の年齢15～49歳の各歳における出生率の合計である。

都道府県の値は年齢5歳階級における出生率5倍の合計である。

国勢調査年次は国勢調査確定数の日本人口、他の年次は10月1日現在推計人口(5歳階級)の総人口を用いた。

資料：国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」、厚生労働省「人口動態統計」

実は私は、10歳の女の子の母親です。私自身、仕事をしながら半年の育休をとった上で子育てをしてきて、その中で、子どもはとてかわいし、子育てもいい経験になっているなど、本当にかげがえのない経験だと思いながら、その反面、何でこんなに育てにくいんだろうと。

私は三重県の田舎で育ったんですが、私が育ったときとあまりにも環境が違う。子どもを自由に公園で「一人で遊びに行きなさい」と出してあげることすらできない。この環境というのは一体何だろう?というような1人の親としての思いを込めて仕事をさせていただいています。今日は、そういう立場から私も議論に参加させていただきたいと思っています。



【(左)榊原氏、(中央)薬丸氏、(右)安藤氏】

早速ですので、登壇者の皆さん、今日は学生の若い皆さんから、仕事を始められて4、5年の方、ちょうどお父さんとお母さんになられたばかりの方、子育ての大先輩のお2人のゲストという形で議論に参加させていただきます。

では、薬丸さんはさっきお話をいただきましたので、ゲストの安藤さん、自己紹介をいただきたいと思っています。先ほどのご紹介にもありましたけれども、今パパの先頭を切っているいろいろなことをやっていらっしゃる方という意味で、マスコミからもとても注目されている方です。ご本人の口から、どういうことをなさっているのか、自己紹介とメッセージをいただきたいと思っています。お願いします。

【安藤】 皆さん、こんにちは。NPO法人ファザーリング・ジャパンの代表の安藤です。10歳と7歳の父親ですが、実は2日後に第3子が産まれる予定です。今日産気づいたら、この壇上から消えて駆けつけなければいけないので、事務局の方に一応お断りをしています。でも5分前に妻に電話したら、まだおりてきていないと。「あなたは次世代の父親たちに向けてしっかりおしゃべりしてきなさい」と言われましたので、多分大丈夫だと思います。ですから、来週には3人の父親になっているということです。



【安藤氏】

私は、いろいろ仕事を変えて、9回ほど転職をして、今NPOの代表をやっています。サラリーマン時代も長かったですが、10年前、35歳のときに上の娘が生まれまして、そのときにお父さんスイッチが入りました。それまでは自分が父親になるというイメージってあまりなかったのですが、7カ月目ぐらいに性別がわかって、娘だとわかった瞬間にスイッチが入って、世界が広がった感じがして、翌日、絵本を100冊買って誕生を待っていました。つまり、娘とのコミュニケーションを楽しむための何かツールが欲しかったんですね。男って、何か道具をほしがるという傾向があって、サッカーボールの人もいれば、野球のグラブの人もいるんですけども、僕の場合は、文系だったものですから、絵本ということになりまして、100冊買って待っていた。



それで娘が生まれてから、半年目ぐらいから、「いないいないばあ」とか、「もこもこもこ」とか、そういった音感の絵本から入って、だんだん娘が言葉を獲得する中でお話に行ったり、4、5歳はなぞなぞの絵本とか盛り上がりましたね。7歳、1年生が終わるまで、每晚2冊ずつ、ずっと絵本を娘と読んできました。ですから延べ5,000冊ぐらい多分読んでいることになりますね。

3日ほど前に、僕が仕事を終えて家に帰ったら、ソファにおなかの大きな奥さんが座ってまして、その横に10歳の娘が座って、娘がおなかの赤ちゃんに絵本を読んでいたんです。僕、それを見て結構感動してしまっていて、つまり僕が7年間ずっとやってきたこと、僕の父親としての思いというのはこうやってつながっていくんだなというのが実感できたんです。娘とはここ2年ぐらい絵本は読んでなかったのですが、3日前の風景を見て何かこう、自分がやってきたことは間違っていなかったんだと実感しました。でももうすぐ子どもが生まれるので、もう1度、またその絵本ライフが始まるかなと非常に楽しみにしています。

私生活はそういうことなんですけれども、仕事では今、子育てを楽しんで笑っているお父さんを増やしたいということで、NPO法人を昨年つくりました。父親の子育てを楽しむ情報であるとか、お父さん同士いろいろ悩みを相談したり、情報を交換できるコミュニティーづくりが目的です。

3月に「子育てパパ力<sup>ちから</sup>検定」を開催いたします。日本で初めての父親力検定ですね。0歳～6歳児ぐらいのお子さんのいるお父さんを対象にしていますが、子育ての基本的な知識 離乳食で使ってはいけない食品であるとか、あるいは子どもの発達に関する問題が出ます。ただそれだけではなくて、男性の育児休暇の取得というのが話題になっていますけれども、例えば育児の日本の取得率は何パーセントか？あるいは育児をとったときにもらえる給付金は給料の何パーセントか？といった育児支援制度のことも問題にしました。日本にはまだ産休と育児の区別すらつかない男性も結構いらっしゃるからです。また、日本のお父さんに欠けているパパ力って、やはりコミュニケーション力じゃないかと。絵本やアニメ、昔あそび。そういった子どもとのコミュニケーションを活発にするキッカケとなる問題も含まれています。ぜひ、現役のお父さんだけでなく、現在独身の次世代パパ、ママでも、おじいちゃん、おばあちゃんでも、学生さんでも受けられますので、ご興味のある方は、公式のホームページを、ご覧になっていただければと思います。

【榊原】 ありがとうございます。相当注目されているようですよね。応募も集まっているようで。また伺いたいと思います。

それでは酒井さんから順番に、自己紹介とこのフォーラムでの思いを一言ずつお願いしたいと思います。

【酒井】 どうも初めまして。東京学芸大学教育学部で環境教育の勉強をしている4年生の酒井玲奈と申します。

私は、もともと4年間、環境教育というものを勉強してきて、子どもと一緒に農学校という形で、農業体験をやるようなサークル活動をしてきました。そういったものを経験してきた中で、子どもってすごいなとか、子どもにいろいろ与えるって楽しいことだなと思ってきました。今回、卒業論文を書いたんです

が、そのときに初めて、子どものすこやかな育ちを一番考えている人って誰なんだろう?と思ったときに、子育て支援という活動をしている方たちがちょうど目にとまり、そういう方たちと交流させていただく中で、勉強してきました。それで最終的に環境教育と子育て支援のつながりって何だろうという研究論文を書かせていただきました。それを通じて、私が初めて、この3カ月ぐらいで、子育て支援というのを知りました。今まで保育園というものの存在は知っていたし、産休・育休というものがあるというのも聞いてはいたんですけども、自分自身のリアルなこととして考えたことが全然なくて、就職活動するときも、あまりそういうことを考えずに就職活動してしまったので、今になって、そういうことをもっと早く知っておけばよかったなというふうに思った部分もありました。どうしたらもっと子育て支援とか、この子育てというものをみんなが考える社会になるんだろうということをちょっと思いながら、今日は参加しています。よろしくお願いいたします。

【榊原】 よろしくお願ひします。では、お隣の高橋さん、お願ひします。高橋さんは、社会福祉を今学んでいらっしゃるということです。

【高橋】 初めまして。上智大学から来ました総合人間科学部社会福祉学科3年の高橋杏子と申します。

サークルは全然子育てとは関係がないのですが、女子野球をやっています。社会福祉学科で学んできて、今一番興味のある分野が、人口減少社会です。少子高齢化社会について、この間、データを調べてみたところ、このままだと、50年後には、今の総人口約1億2,000万人から大体4,000万人ぐらい減ってしまう(2)ようになってしまふみたいです。そうなると、本当に社会の体制が変革してしまうし、経済などにもすごく影響を及ぼすと思うんですけども、どうすればそれを防げるかということ考えたときに、人口ピラミッドの変化を見てみたら、少子化というのがひどく進んでしまうということが分かったんですね。それで、私は最近興味を持ったばかりなので、全然勉強不足で、あまり知識もないんですけども、その本当に目前にある大変な状態をどうすればいいかと考えたときには、私たちの世代や私の子どもに当たる世代の人たちが子育てについて興味を持って、子どもを産もうという気を起こさないといけないんだろうなというのをすごく感じました。

このフォーラムでは、お役に立てるかわからないんですけども、皆様が子育てにつ

て興味を持たれるような話ができればいいなと思っています。よろしくお願いいたします。

【榊原】 ありがとうございます。では、次も同じ大学3年生の中島さん。キャリアデザイン学部という新しい分野で学んでいらっしゃるということですよ。

※2 総人口及び人口増加の将来推計：2005～2055年

年次	人 口 (1,000人)			人 口 増 加	
	総 数	男	女	実数 (1,000人)	年平均人口 増加率(%)
2005	127,768	62,349	65,419		
2006	127,762	62,310	65,453	-6	-0.00
2007	127,694	62,239	65,455	-69	-0.05
2010	127,176	61,868	65,309	-219	-0.17
2015	125,430	60,806	64,624	-431	-0.34
2020	122,735	59,284	63,451	-606	-0.49
2025	119,270	57,406	61,864	-745	-0.62
2030	115,224	55,279	59,944	-850	-0.73
2035	110,679	52,953	57,726	-947	-0.85
2040	105,695	50,467	55,227	-1,026	-0.96
2045	100,443	47,898	52,545	-1,060	-1.04
2050	95,152	45,320	49,832	-5,291	-1.08
2055	89,930	42,748	47,182	-5,221	-1.12

国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(平成18年12月推計)による各年10月1日現在の推計人口(〔出生中位(死亡中位)〕推計値)。年平均人口増加率(%)は、 $(n - (P1/P0) - 1) \times 100$ によって算出。ただし、P0、P1はそれぞれ期首、期末人口、nは期間。1)



【中島】 こんにちは。法政大学キャリアデザイン学部3年の中島繁樹と申します。

私が所属するキャリアデザイン学部では、「より自分らしく生きるためには」をテーマに教育学、経営学、そして文化人類学からキャリア形成を進めています。また、ゼミでは、ワーク・ライフ・バランス( 3)について研究しております。また、女性の働き方や長時間労働などについて学んでい



ます。我々のゼミでは、男子学生が7人、女子学生が20人ということで、まだまだワーク・ライフ・バランスといった言葉が女性に敏感な言葉であって、男子学生には実感がないというか、まだ重要視されていないのかなと思っていたのですが、次に入ってくる学生が、男子が8人、女子が4人ということで、とうとう男子学生も自分の将来の働き方について興味を示し始めたのかなと思っている次第です。

私が最初にこのゼミを選んだ理由は、これから社会人になるに当たって、女性にとって働きやすい環境を作るためには、女性が企業や国に対して投げかけるよりも、男性が女性にとって働きやすい環境をつくってあげることがいち早くワーク・ライフ・バランスを実現することができ、女性が働きやすい環境を整えることによって、男子自身も働きやすい環境、子育てしやすい環境ができるのではないかと考えたからです。今日は、学生代表として、と言いますか・・・男子代表として、本当は男だって子育てしたいし、育児休暇をとれるのであればとりたい人が私以外にもたくさんいるんだよ、ということを伝えられたらと思っています。よろしくをお願いします。

【榊原】 ありがとうございます。何か力強い後続世代が控えているという感じで、安藤さん、心強いですね。

※3 ワーク・ライフ・バランスとは・・・

ワーク・ライフ・バランスとは、「仕事と(家庭)生活の調和」のことで、1980年代の終わりごろに米国、英国で生まれた考え方です。

平成19年12月18日総理大臣官邸において開かれた「官民トップ会議」において、「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」及び「仕事と生活の調和推進のための行動指針」が、政労使による調印の上、決定されました。

この「憲章」におけるワーク・ライフ・バランスの定義は、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」とされています。

また、この他の文献等では、以下のとおりとなっています。

**男女共同参画会議 少子化と男女共同参画に関する専門調査会：**

老若男女誰もが、仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、様々な活動について、自ら希望するバランスで展開できる状態である。

**「子どもと家族を応援する日本」重点戦略会議：**

個人が仕事上の責任を果たしつつ、結婚や育児をはじめとする家族形成のほか、介護やキャリア形成、地域活動への参加等、個人や多様なライフスタイルの家族がライフステージに応じた希望を実現できるようにすることである。

【榊原】 次に、横田さん。今日は赤ちゃんと一緒にこの会場に来てくださって、4カ月のかわいい女の子を今預けて登壇してくださっているんですけども、唯一の子育て中のママさんということで自己紹介からお願いします。

【横田】 初めまして。昨年9月に第1子の長女を出産いたしました横田と申します。

子育ては、先輩方からいろいろ大変だと伺っていたんですが、今自分で4カ月子育てをしていく中で、すごく毎日がフレッシュで楽しくて、最近になって主人も子育てを一緒に手伝ってくれたり、休みの日にはお散歩に一緒に行ってくれたりしますので、毎日つらくはなく、すごく楽しい日々を過ごしております。

私は妊娠7カ月ぎりぎりまで働いていたんですが、その中で、結婚して市から市へ引っ越しをした際に、妊婦さんに対してや子どもを持つ親に対しての教室などが、市によって全く違った内容だったり、引っ越し先でも同じことが受けられるのかとっていたら、全くそれが受けられなかったりしたことを自分で経験しています。

親子で楽しんだり、自分の子育てライフをもっと楽しくできたらと思い、参加させていただきました。本日はよろしく願いいたします。

【榊原】 よろしく願いいたします。ありがとうございます。

篠さんも、偶然、同じ昨年9月にパパになられて、お嬢さんがちょうど4カ月ということで、では、お願いします。

【篠】 初めまして。篠淳一郎と申します。

今ご紹介いただきましたように、昨年9月に女の子が生まれました。僕の人生というところとちょっと大きいかもしれないんですけども、生活において今、すごく糧になっていることがあります。

実は、立ち会い出産を経験しまして、奥さんは非常に難産で、36時間かかって出産したんです。陣痛が起きているときと出産するときのベッドというのが同じで、個室には家族がみんな入ってきていいようなところだったんですが、その36時間の中で、僕も妻を落ち着かせたりしながら、奥さんの実家のお父さん、お母さん、そしてきょうだいたちまでもが病院に来て、本当に家族みんなで奥さんを応援しながら出産をしました。

産まれたときは、僕は本当に感極まってしまいました。長かったし、精神的にも大分やられていたというところもあるんですけども、赤ちゃんが泣いたというのを確認したら、すぐに奥さんのところに行って、「本当におれはおまえを尊敬する」と言って讚えたんですけども、それくらい女性はすごいなというのを認識しました。日々の生活においても、これを今僕ら男がやっているサラリーマンとしての仕事に例えると、世の中のお母さんたちがやっている仕事というのはすごいなと思うんですよね。朝起きて、子どもにミルクをやることから始めるんですけども、その労働時間たるや、普通のサラリーマンより多いんじゃないかと思うぐらい。日々よく働いてくれているので、僕も手伝わなければいけないと思っていたんですけども、なかなか腰が重くて、仕事から疲れて帰ってくると、ついつい任せてしまって、「やってよ」という



感じだったんです。そこで僕を動かしたのが、その立ち会い出産の経験なんです。あれだけの経験をして、一緒にそういうことを乗り越えて、絆ができたことで、何かこう、面倒くさいなと思っていても動ける、夫婦生活も今のところ円満に行っているんですけども、それは、やっぱりその立ち会いがあったからかなと思います。

子育てについても、一つひとつ子どもの成長というのが実感できて、本当に楽しいなと思います。今、僕の持論ですべて子育てをしているので、このようなフォーラムを通じて、いろいろな方のお話を聞いた



りとか、いろいろな意見を伺いながら今後に役立てていきたいと思っております。よろしくをお願いします。

【榊原】 すごくいい立ち会い出産のご経験をされたんですね。10年前に私が出産した頃は、立ち会い出産がようやく一般化しつつあったんですが、それでもまだ1割くらいでした。医療機関側もちょっと躊躇するようなどころもあったのに、今はもうほとんどの方が、立会いができる産院であつたら9割以上が立ち会い

出産をするような時代になっているようです。その中でもとてもいい体験をしている方が増えているって聞いてはいたんですけども、実体験のある方にこうしてお目にかかる機会があまりありませんでしたので、おそらく私のように大分昔に出産して、ご主人様からこういう言葉をかけてもらったことがない女性からすると、いいなという感じがしてうらやましい。そういった体験が広がってきているのはとてもうれしいことだなと思って聞きました。

それでは、最後に原田さん、お願いします。社会人4年目で、独身でいらっしゃるということです。

【原田】 皆さん、こんにちは。日本電気株式会社で、入社4年目の原田と申します。今日は、どのような話を自己紹介にしようかなと考えていたんですが、自分の仕事と子育てはどういうものかというところの関わり・関係について話そうと思います。

私は営業を4年間していますが、一番大事なことは、お客様にいかに信頼していただいて、お客様と関係をつくっていくかということだと思ふんです。そういうことをしていくに当たって、例えば、お客様に、「明日までに資料を出してほしい」と依頼されて徹夜で資料を作ったり、「一緒に飲みに行こう」と誘っていただいて、夜遅くになってしまったりと、時間の使い方が難しいのかな？という職種だと思っております。

そんな営業をやっているメンバーが、うちの部でもあり、会社もそうなんですけれども、何百人、何千人といまして、夜遅くなってしまうというところがあって、そういう意識の中で、今、話に出た育児休暇であるとか、短時間勤務であるとかいうところを、逆にやろうという意識が少ないのかなと思います。特に男の社員の方ですね。そういう制度があるのも知らないという方も現場には結構いらして、その辺をどういうふうに進透させていくのかというのが今後重要になろうかと考えています。

今日は、いろいろな方のお話を聞いて、すばらしいコメントをいただいた後なので、どういう話をしよ

うかと思っているんですが、今の自分の立場であるとか、先ほどの現場のお話であるとかというのを織りまぜながら、話ができればいいなと考えています。

ちなみに私も、葉丸さんと同じ4人きょうだいの長男で、家族構成も、男、男、女と、同じなんです。先ほどの風邪を引かれたときのお話を聞いて、やはり両親にはお世話になったなという思いがあって、この場を借りて、もう一度感謝の意味も両親に届けたいと思うとともに、今日、これ(紅白うちわ)をいただけると聞きましたので、これを振って、こんなことに生まれましたよというようなことにしようかなと考えておりますので、こんな話をもってごあいさつとさせていただきます。今日はよろしくお願いします。

## みんな少子化への危機感を感じている

【榊原】 ありがとうございます。今、原田さんが言ってくくださったように、子育ては、次の世代を育てるという営みではあるんですけども、それを通して、自分はどうやって育ってきたんだっけ？とか、自分が育ったときって親はどうしてくれたんだっけ？周りの人ってどうだったっけ？ということまで思い出す。その先のおじいちゃん、おばあちゃんはどうだったんだろう？ずっと営まれてきた、つながってきた命の中で自分はどうなんだろう？ということを考えるような機会にもなる。そういった人間として生きていく中で、非常に深い意味のある営みだなというふうに私も、たった1人なんですけれども、子育てをしながら思うことがいろいろあります。

今、皆さん話をさせていただいた中で、「少子化って、やはりここまで来るとまずいよね」という話が何人かの方からありましたので、ここで、この「イエス/ノー」のうちわを使わせていただこうかなと思います。幾つか質問をさせていただきます。

少子化は、「人口が減っていくという意味でまずいよね」という、または「年金がこれじゃあもたないからやばいんじゃない？」という見方もある一方で、「いや、いや、日本って、もう人間が増え過ぎているし、資源もこれじゃあ涸渇しちゃうんだから、ある程度人間は減っていくのはいいんじゃないか」という見方も実は世の中にはあるんですね。

では、皆さんにお聞きします。今のこの日本の少子化、合計特殊出生率が1.3前後にあるんですけども、この低い出生率の状況をどう思われるでしょうか。この出生率、やはりちょっと問題じゃないかと思われる方はイエス。いえ、いえ、まあ何とかなるんじゃないか、またはこういった状況も受け入れていいんじゃないかという方はノー。では、皆さんの意思をぜひ、壇上の方も含めて出してください。はい、お願いします。

【榊原】 そうですね。こちら(壇上)は全員で(イエス)、会場のほうも、こちらから見させていただくと、オレンジ(ノー)の方が本当にちらほら、1割ぐらいでしょうか。ありがとうございました。何か紅白歌合戦だと大変とい





うぐらい白(イエス)優勢ですね。皆さん、この少子化はまずいんじゃないかという気持ちをシェアしていらっしゃるのかなという感じです。

では、そうは言っても、日本もたかだか半世紀前には合計特殊出生率が2.0以上という非常に赤ちゃんの多いベビーブームを経験していた国です。ではお聞きします。「日本の今のこの出生率、回復していくのではないか、いずれ少子化なんていうのはなくなって、また出生率が高い国になるんじゃないか」と思われる方は、白のイエスを、「いや、いや、このままでは少子化というのはなかなか変わらないんじゃないか」とお感じになっている方、オレンジのノーをお願いします。

【榊原】 (ノーが多く上がる。) こちらはさっきよりも(イエスの方が)少ないくらい。皆さん、このままでは少子化が変わらないと。登壇者の方は皆さんオレンジ(ノー)ですね。会場の方も、白(イエス)の方は10人いらっしゃらないという感じです。ありがとうございました。おそらくこうしたテーマのフォーラムに、週末の貴重なお時間を使ってわざわざ足を運ばれるような方たちには何か共通の思いがおりなのかなとは思いますが。

これだけの会場の反応というのはいかがですか。薬丸さん。

【薬丸】 やはり、皆さんは危機と見ていらっしゃるということですよ。でも、それは、世の中が変わらなければ変わらないと思うんです。というのは、やはり子育てをしづらい環境、つまり「子育てをしやすい環境だったら、我々も考えるよ」という方も多分、多くいらっしゃると思うんですよ。やはり自分が子育てしていても、子育てしづらい環境だなというのが分かりますし、これは各自治体と国レベルで、もうちょっと考えていただかないと、いくら我々市民とか都民がそういう思いを持っていても、なかなか行政には届かないというのが今の現実だと思うんですよ。

【榊原】 そうですね。子育てしやすい環境に変えていかなきゃという思いが、国民の中では相当の多数になっているのではないかと。そのとおりですね。そういった状況であったと思うんですけれども。

では、私たちが住んでいる東京について、改めて聞いてみたいと思います。この東京 東京と言っても、首都圏という意味でとらえていただいていると思うんですけれども、日本の中の最大の都市、経済の中心地、人もたくさん集まってくる、この東京ですね。東京という街は、実際に子育てされている方もされていない方も、子育てしやすい街だと思われるでしょうか。思われる方はイエス、子育てしやすい街とはちょっと思えないという方はオレンジ(ノー)。では、皆さんの考えをあらわしてください。

【榊原】 ちょっと分かれてきましたね。6(ノー):4(イエス)、7:3くらいでしょうか。こちらのほうもちょっと分けていますね。ありがとうございました。それは、おそらく、多分皆さんがそれぞれどんな暮らし方をしているかということだと思うんですけれども。

では、今子育てしにくいほうに上げていらした酒井さん。ちょうど就職を決められて、これから社会人になるという新しい人生のステージに向かって、今一歩進めていらっしゃる場所ですから、明日、あさって産まれるという方とはちょっと違うと思うんですが、なぜそう思われるんですか。

【酒井】 何かほかの自治体と比べてということは全然分かりませんし、東京都だから子育てしにくい

というわけじゃないんですけれども。いろいろな取組があちこちであるけれども、私は実際そういう取組を最近まで知らなかったし、生きていく中であまり子育てを真剣に考える機会というのを与えられてこなかった。おそらく、いざ直面したときにも、子どもを育てるに当たって、すごく戸惑うだろうと思うんです。近くを見渡してみても、頼れる人がいるかという、実際、私の家も、両親と私と中学生の妹だけの家族なので、思い当たる、助けてくれる人というのは、身近にはいないと思うし、そういうことを考えたときに、ちょっと心細いなということを東京に暮らしていて感じるの、それでノーを上げてみました。

【榊原】 なるほどね。原田さんは、どうですか。「ノー」のほうでしたね。どうしてそういうふうにお感じになったのか。

【原田】 私も同じです。東京都だからというところは正直わからないとは思いますが、育児をやるに当たっての制度、国としての制度、さっき言ったように浸透がされていない、まだまだ足りないのかなと思います。それから、もう1つ、制度の問題よりも個人の問題もあるのかなと思っています。いかに親が自分の子どものことを知っていますかということも重要だと思うんです。子どもが何に興味を持っていて、何をやらせてあげたらいいだろうというところをちゃんとわかってあげる。そうすると、親の方ももっと子どもに興味を持てて、子どもも親に興味を持てて、お互いに時間をつくらうという意識ができるんじゃないかと考えます。

【榊原】 同じ男性で、ワーク・ライフ・バランスを考えていらっしゃる中島さんはどうですか。「ノー」のほうでしたね。

【中島】 僕は、今、就職活動をしているんですけども、企業説明会などに行くと、女子学生が「はい」と手を挙げて、「御社の育児休暇の取得率はどのくらいですか？」と聞くんです。そうしたら、企業の方は、「女性はほぼ100%に近い状況です」と言っくんです。それで、僕が、「はい」と手を挙げて、「じゃあ、男性の育児休暇はどれくらい取得していますか？」と言うと、長い歴史のある企業でも、「いや、まだとられた方はいません」という企業が多くて、これじゃあ男性は子育てできない環境なんだなという印象を受けます。

【榊原】 中島さんは、先ほど、「僕は育休もとれたらいいな」というようなことをおっしゃっていたように思うんですが、私の40代の世代で周りを見回すと、男性でサラリーマンをしている人の中で、育休をとりたいという人にほとんどお会いしない。本人の気持ちの中というよりは、周囲からそんなこと期待されていないということが本人も分かっているし、職場で言い出せないという雰囲気もあるしという、さまざまなものが絡み合っているんだと思うんですけども。育休をとりたいと言い出す男の人がまだとても少なく、どうも見ると、30代、20代ぐらいの若い男の人になると、ちょっとその辺が変わってきているなと思います。中島さんの周りには、男性でも育休をとりたいという人は増えているんですか。

【中島】 ちょっと周りの男子学生に聞いてみたんですけども、「育児休暇とりたい？」って聞いたら、男子学生のほとんどが、「俺とりたいな」って言うんですね。「でも、本当にとる？」と言ったら、「でも、とれる環境ではないよね」って。実際に昇給とか、そういうことを考えると、本当はとりたいけど、実際

とれないという環境になっている状態です。

【榊原】 なぜとりたいというふうに皆さん言うようになっているんですか。

【中島】 やはり子どもが好きというのがあると思うんですけど。

【榊原】 周りに子育てする人や小さい子どもがいっぱいいて、自分も抱っこしたり、あやしたり、おむつかえたりしてきましたという体験は、皆さんあまりされていないはずですよ。

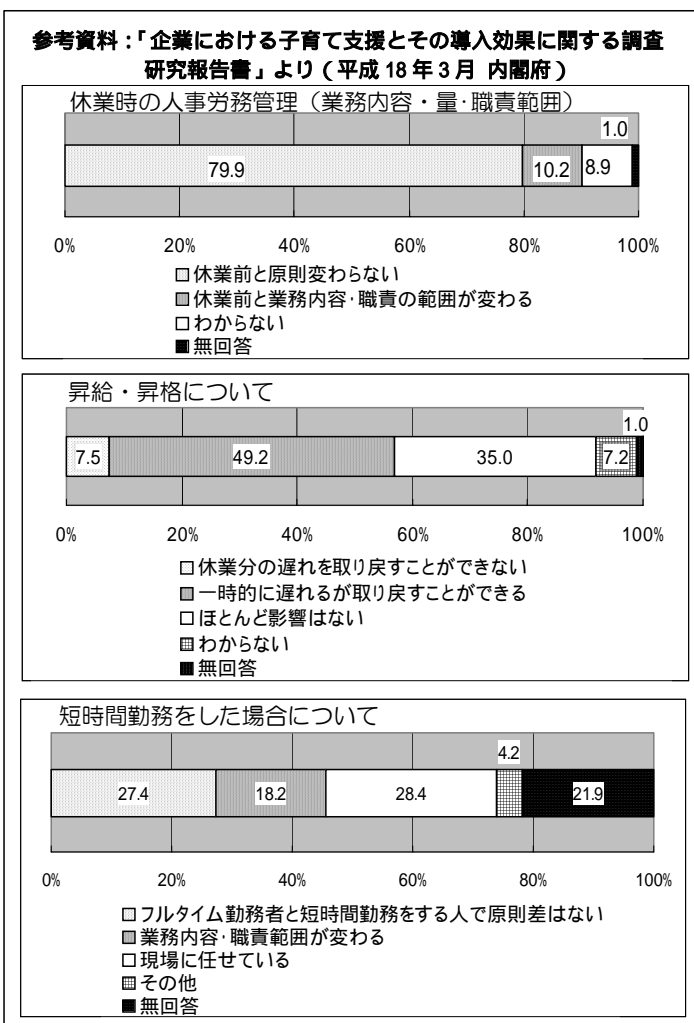
【中島】 そうですね。やっている人はいないですね。

【榊原】 どうして子どもが好きということになるんですか。子育てのイメージは、結構いいなというイメージを持っていらっしゃるということかしら。

【中島】 そうですね。子育てというか、結構20歳を超えてくると、産もうと思えば産めちゃう年でもありますので、そういうふうに考えると、ちょっとずつ大人になってきて、子どもがいる環境を意識し始めているのかなというのは感じます。

【榊原】 そうですか。そこが我々40代以上の世代には何かうまく見えていないような感じがしますね。さらにもっと上の、特に男性たちは、同じようなスーツを着て、同じ男である自分の後輩たちは、おそらく自分と同じように、「何よりもまず仕事が大事」って思っているだろうと信じている感じが50代のほうから、そこはかたなく漂ってくるんですね。でも、今、中島さんがおっしゃったみたいに、若い世代にここまで育休にも前向きな人が広がっているということ、子育てに対するイメージ、思いが違ってきているということが、いろいろなところ、いろいろな形でミスマッチを起こしているなという感じを受けています。それが多分、一番見えるのは、採用のとき。若い世代の人たちは、女子学生はもちろん、男子学生も子育てしやすい会社かなという目で自分の将来のキャリアも含め、会社選びのときに、そういった視点も持って選ぶようになっているのに、会社側のほうにそれだけの準備ができていないのか。そこはどうも上の世代にとって課題になっているのかなという感じがするんですが、例えば企業の幹部もなさった安藤さん、その辺、どういうふうにお感じですか。

【安藤】 そうですね。業種とか仕事の内

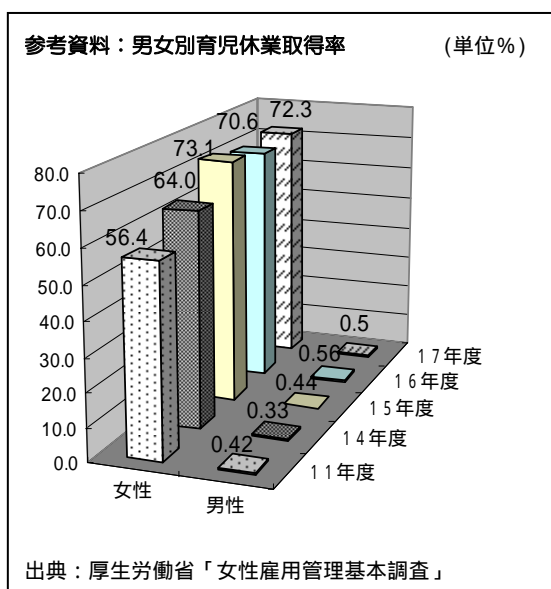


容によって、まちまちではありますが、最近特に新卒が売り手市場ですよね。内定を2つ、3つ持ったときに、より自分のライフデザインがしやすい、自分の望むライフスタイルが送れる企業を選ぶ傾向というのが当然出てきますね。同じような知名度、あるいは給料、条件、待遇でいったら、やはりそういう企業を選ぶ。私は今、仕事で大企業の人事部さんとおつき合っていますが、就職説明会で男子学生が手を挙げて、「男性社員の育休取得率を教えてください」というのが当たり前の質問になってきていると聞いてます。

【榊原】 そこまで行っていますか。

【安藤】 僕も聞いて、本当かなと思ったけど、結構数社、同じようなことをおっしゃるんですね。10年前ではあり得なかったですね。売り手市場のせいもあるんですけども、やはり中島君のような意識を持った若い人がどんどん増えているのでしょう。その波は確実に感じますね。

【榊原】 どうでしょう、複数企業の人事とおつき合いがあるということは、企業側にはそういったような意識の変化に対応する準備というのはできてきているんですか。



【安藤】 企業はいまグローバル化の中で、経営環境がかなり激変していますよね。そういう中で、社員のワーク・ライフ・バランスを整えないと、いい人材がとれない。あるいは、今いる主力の社員が子育て世代に来たときに、この会社では子育てできないから、適えられる企業に転職しようという流れがあるんですね。ですから、今、大企業のワーク・ライフ・バランス施策というのは、経営戦略になってきています。10年後に中核を担う30代から20代の人たちをどう繋ぎとめ、活性化するか。いま社員の子育て支援に力を入れている企業が多分10年後伸びていくだろうと思います。逆にそこに無頓着な企業は生き残れないん

じゃないかと僕は感じています。

【榊原】 なるほどね。ビジネス戦略の1つに、ワーク・ライフ・バランスや子育て支援がなっているという流れもあるということですね。

【安藤】 そうですね。欧米では、ダイバーシティ（diversity）（4）の考え方はもう当たり前。子育てだけでなく介護の問題などもあるので、会社は社員の人々が私生活の中で抱えている問題を会社が理解して、フレキシブルな働き方を認めてあげなくてはならない。そういう会社だったら従業員のロイヤルティ（loyalty）（5）は逆に高まっていくんですね。そこがこれからの企業の人事戦略にとってすごく大事なことだと僕は思います。

【榊原】 「ワーク・ライフ・バランス」なんていう言葉は、私が就職活動したウン十年前にはなかった

（4）ダイバーシティ（diversity）：多様性、相違性などという。多様な人材。  
（5）ロイヤルティ（loyalty）：ロイヤリティーともいう。忠誠心のこと。



ですけれども、今はこんな片仮名の長い言葉は、新聞でもできるだけ使わないようにしているのに、使わざるを得ないぐらい、世の中で相当キーワードになってきているなと感じます。ただ、皆さんが思い描くイメージは、まだばらばらだなという感じもしています。「ワーク・ライフ・バランス」を簡単に言うと、仕事とそれ以外のプライベートな生活、その中に子育てや介護や、自分のためにもう1回勉強したりということも含めて、そういった自分の私生活と仕事のバランスをとって、どちらもうまくいかせる。そういう働き方という理解でよろしいでしょうか。

【安藤】 そうですね。

【榊原】 そういうことを中島さんは学問としてやっていらっしゃるということなんですが、女子学生として、高橋さんはこれから就職活動なども考えられる立場だと思うんですけども、先ほど女子学生も皆さん「育休どうですか？」と聞くというお話がでしたが、やはり、これからの働き方の中のワーク・ライフ・バランスや子育て支援への関心は高いですか。

【高橋】 私も、すごく子育てには興味があって、子どもは育てたいと思っています。同時に、将来を考えたときに、働きながらやりたいとすごく思っています。子育てというのは、別に母親がやらなければいけないとか、父親がやらなければいけないとか、そういう決まりはないと思うし、その子にとって親というのは2人なわけだから、どっちもがやるものじゃないかと私は思っているんで、育休がとれるかとれないかとか、どれぐらいとれるかとか、そういうのは興味がありますね。

## 東京や首都圏は子育てしやすいか？

【榊原】 先ほど子育てのイメージについて、東京は子育てしやすい街かという問いに対しては否定的なお答えも相当あったんですが、それでも横田さんは、「子育て大変だよという話は聞いていたんだけど、実際に子育てをし始めたら、私は今楽しめている」とおっしゃっていましたね。お嬢さんがあれだけにここにこしていらっしゃるのをお母さんがきっと気持ちが安定しているからなのかなと思うようなお話でした。

横田さんは、これだけ少子化が進んだり、子育てしにくい環境になっていると思う人が多い中で、子育てが楽しいと思えるような状況を今手にしていらっしゃるというのはなぜだと思いますか。

【横田】 自分がつらいと思いながら子どもを抱っこしたりしてしまうと、それが伝わってしまって、泣いてしまったり、泣きやまなかったりするので、いかに私が楽しく赤ちゃんに、「あなたがかわいいのよ、私がお母さんだから、安心して大丈夫よ」という気持ちを伝えないと、赤ちゃんも、「この人で大丈夫なのかな、この人が母親で大丈夫かな」みたいなことを思われてしまうことがあるんですね。主人は最近出張などが多んですが、家を空けていて1週間ぶりに帰ってくると、「この人はお父さんなのかな？」というのを赤ちゃんがたまに示すことがあります。4カ月なので、目はそんなに見えていないので、声を聞いて本当にお父さんかどうかを確かめるんですね。1時間ぐらい抱っこしていると、「あ、お父さんだ」とわかるみたいなんです。それまでの間にカリカリしたり、怒ってしまって「もう、いい」とかってやってしまうと、泣いて「もうこの人はお父さんじゃない」みたいな感じになってしまうので、主人と2人で子育てを

楽しみながら、「あなたのお母さんになってよかった、お父さんになってよかった」というのを楽しみながら子育てをして行っています。

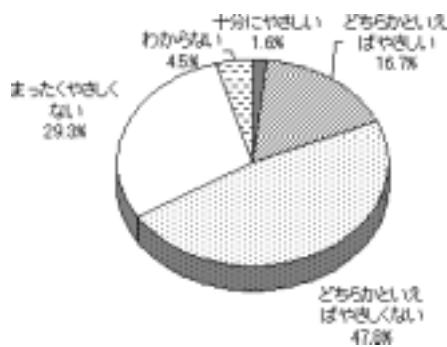
【榊原】 さきほど自治体によって子育てのいろいろな支援の制度が違うとか、ちょっと戸惑われることもあったとおっしゃっていたんですけども、実際にお子さんを持たれる前の子育てのイメージと持っただけからのイメージで変わりましたか。

【横田】 以前、私は、子どもがよく遊びに来る遊園地でお仕事をずっとさせていただいていたんです。そのときから、子どもがすごく好きで、そういうところで働くことを望んだんです。そこに来るお母さんたちが、「ここに一緒に子どもを連れてきても、店員さんたちがすごく子どもに対して扱いというか、一緒に遊んでくれたりしてくれるので、連れてきやすい」と。でも、市とかでそういう支援してくれるところは、「連れてきてもいいですけど、私たちは面倒見ませんよ」というところが多いので、市でも県でも、いろいろなところでそういうところを増やしてほしいということを少し話していかれたりしました。

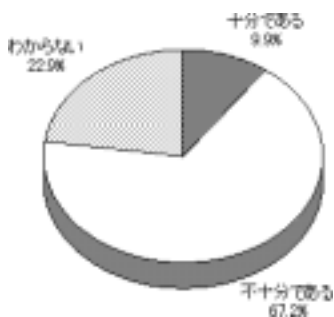
そういう話を聞いていたので、私も子どもを持って、そういう施設は本当に少ないなと思いました。ベビーカーで出かけたりしても、新しくできた、きれいな電車に乗るところなどには車いす用のエレベーターがあったりするんですけども、古い駅などになくて階段でみんなベビーカーをおろしたり、上り下り

参考資料：平成19年度第4回インターネット都政モニターアンケート「子育てにやさしい社会」結果  
(平成20年2月7日東京都生活文化スポーツ局)

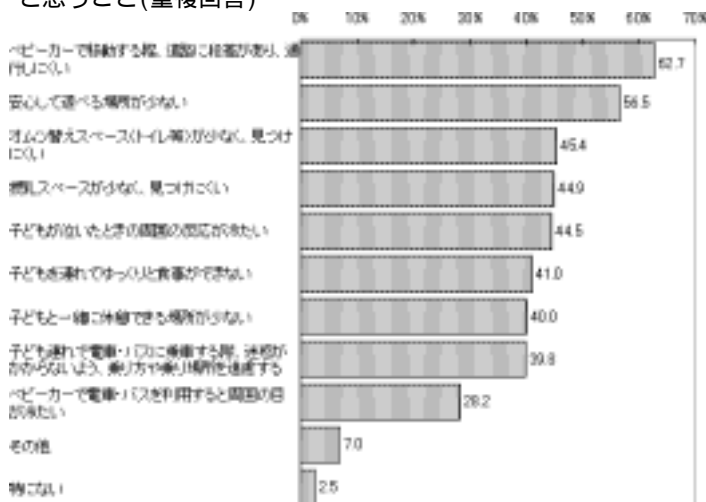
Q今の社会は子育てにやさしいと思いますか



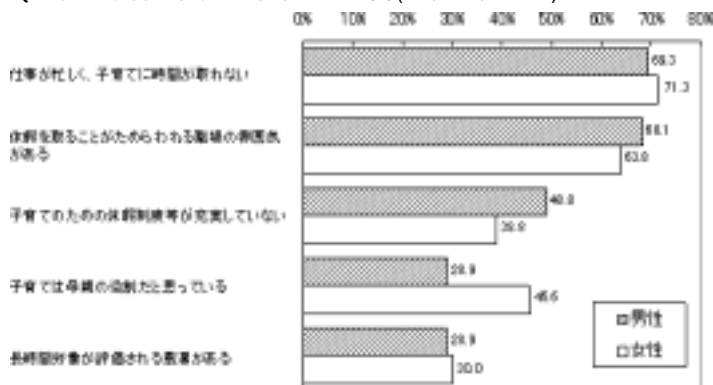
Q一般的に父親の子育て参加が十分だと思いますか



Q小さな子どもと外出する際に困ること、困るだろうと思うこと(重複回答)



Q父親の子育て参加が不十分な理由(上位5位まで)



をしているので、これだけ子育てをしたいと思っている人、子育てをしている人がいるんだから、そういうところも少し行政などで、そういう施設もちょっとずつ変えていってほしいなと、すごく思っています。

【榊原】 なるほど。今はまだ、お子さんが4カ月で本当に小さいから、そんなに遠くまで長距離にというわけにはいかないでしょうけれども、確かに出歩き始めると、ベビーカーではガタガタッと行きにくかったり、たくさんの交通量があるところでは、周りの方のご迷惑になってしまうということも、赤ちゃんにとってもお母さんにとってもつらかったりしますよね。ただでさえ小さい赤ちゃんがいて、こんなに大きい荷物、こっちにはミルク、こっちはお着替えとかがって持って、赤ちゃんをベビーカーを抱えてバスに乗らなければいけないとか、何か障害物競争をやっているんじゃないかと思うような大変な思いをして街を通っていかれるお母さんたちを私も見かけることがあって、もう少し何とかならないかなということは、確かに思います。例えば、ちょっと今だれか預かってほしいなというときに、ぼっと預ける先があったり、少し何か困ったときに、ぱっとアドバイスをくれる人がいたり、もう少し出歩きやすくなったりというようなことがあると、子育ての負担感というのも減りますかね。その辺はどうですか。実際に赤ちゃんを持って4カ月のお父さんの篠さんとしては。

【篠】 おっしゃるとおりだなと思いましたね。毎年田植えの時期と稲刈りの時期には、必ず新潟で農業をしている妻の実家の手伝いをするんですけども、子どもが産まれる前から、こういう自然と触れあう経験というのをさせてあげたいなと思っていました。そういった意味でも、自分の子どもはまだ4カ月なんですけど、歩けるようになったら、早速、連れていって、田舎の自然な空気や、農業の体験などを存分にさせてあげたいと思っています。東京は自然が少ないというイメージが少しあるのと、酒井さんのお話にもありましたが、田舎では集落全体がみんな仲よくて、情報交換したり、何か物を持ってきたり、今日こんなことがあったという会話があるんですけども、都内の集合住宅では、なかなかそういうことが見受けられないというイメージがあります。もう少し普通に、コミュニケーションなどもとれてくると楽しくなってくるのかなと思いますね。

【榊原】 子育てについて、相当先輩格としては、薬丸さん、いかがでしょうか。「子育てって、なかなかどうも大変そうだな」とか、「しんどそうだな」というイメージを若い世代の人たちが持ってしまう。一方で、横田さんは「聞いていたほどではない、楽しめているよ」とおっしゃっている。イメージのほう在实际よりも実は重そうだったということもあるくらいに、産む前、子育てを始める前に、既にどうも何か大変そうというイメージが相当あるようなんですけども、

4人育てられるというのは、相当な子育て力をお持ちのカップル、ご家庭だと思うんですけども、どうすれば子育てを楽しめるような環境を、家庭の中でも、できたら周囲もというふうに作っていける突破口になりますかね。

## もっと子育てを楽しもう パパも地域デビューを

【薬丸】 やはり楽しむことですよね。自分たちが楽しまないと。

「楽しいです」と言葉では言っている、日々いろいろな変化があって、親としても対応に躊躇するようなことも起きてしまうんですよ。病気したりとか、事故が起こったり、けがをしまったりとか。そういうときに、つらいこともあるんですけども、自分たちが楽しむということを前提に子育てをしないと。先ほど横田さんがおっしゃったように、子どもって、そういうところにもものすごく敏感ですから。そういうのが伝わってしまうと思うんですよ。

一番最近でいけないと思うのは、「ゆとり教育」っていうのがありましたよね。最近になって、「実は間違っていました」というようなことを言っている人もいますよ。そうすると、子どもは、「じゃあ、自分たちは間違った教育を受けていたの?」ということを感じる子どもも少なくないんです。だから、大人もコメントするときや、接し方などを考えなければいけない。何か今、自分も含めて大人たちも迷走しているのかなと思いますね。世の中、凶悪犯罪とか、インターネットというのは非常に便利で、いいツールだと思いますけれども、時にそれが誘惑や恐怖にもなりますから。昔よりは、どうやって子どもを守っていかうという、我々も含めて、親がちょっと迷走している部分があるのかなという気分も持ち合わせていますね

【榊原】 なるほどね。薬丸さんがおっしゃった、楽しむことって、言うのは簡単。みんな「そうですよね」と思うけど、それを本当に実行して、子どもたちにも伝わるように生活の中で実現していくのは、大変  
大変というか、難しいことだなと.....。



【薬丸】 そうですね。やはり環境だと思うんですよ。僕は、この東京という地から出たことがないんですけども、子どものころに23区と市と両方で生活をしたんですね。区にいるときよりも市のほうが自分が生き生きとしていたような気がするんですよ。緑が非常に豊かで...。自然が多くて、それから家でも鍵をかけていないような家だったんですね。「ただいま」って帰ってくると、ランドセルを玄関にぽーんと投げて、そのまま遊びに行ってしまう。今のうちの子どもたちにそういう光景は見られないですものね。

【榊原】 本当ですよ。

【薬丸】 周りに子どもがあまりいないということもあるんですけども。

【榊原】 遊びに行こうと思ったら、まず電話でアポイントを入れて、何時に今から伺って 伺ってとは子どもは言わないけれども、何時からだったら何分間遊べるかみたいな感じですよ。

【薬丸】 本当にそういう感じなんです。市に住んでいたときは、近くに団地があって、そこに集会場というのがあったんですよ。そこは出入り自由で、子どもたちが本当に遊べたんですよ。それで、その自治会の会長さんとかがボランティアで子どもたちを見ていてくださったんです。悪いことをしたら怒るし、子どものころは、がんこおやじだな、口うるさいおやじだなというふうに思っていたんですけども。でも、ああいう人の存在が、ちょっと最近の東京23区の中では少ないのかなというふうに、僕個人レベルですけどもね。下町のほうにはまだそういうものが根づいているのかもしれないですけども、ちょ

っと感じる部分がありますね。

【榊原】 なるほどね。ある研究者の方から聞いたお話なんですけれども、日本は、それこそ昭和30年代、40年代ぐらいまでは、どこにも空き地と言われるものがあって、また都市部でも路地と言われるものがあって、子どもたちにとっての聖域、勝手に遊んで、何してもいい、かくれんぼしてもいい、わーっと群れて遊べるような、子どもたちのためのパラダイスというのが、別にそれは都がつくってくれたわけでも区が整備したわけでもないけれども、自然に地域の中にあった。それを、駐車場にしよう、マンションを建てよう、ここも整備して何々に使おうと、大人の都合でどんどん減らしてきて、子どもたちが行き場を失っている。その変化のスピードがすごいことが数字でも出ているんですと伺ったことがありました。空間もなくなったけれども、見守ってくれる大人の目もなくなっている。確かにそうですね。商店街だったら、お父さん、お母さんがいなくても、どこかのおっちゃんやおばちゃんがちょっと見てくれていたりとか、関わってくれたりとか、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいったりとか。そういった子どもが育つ場というのが都市部にも田舎にも両方あったような気がするんですが、今はそれを、心して、もう1回つくってあげないと、子どもたちの周りにはないというようなところまで、来ているなというのを私も感じます。その中で子育て支援という形で、親子の集いの広場とか、いろいろな活動も始まってきているということを感じます。

また最近、女性たちが、特に母親たちがボランティアとかNPOとか、いろいろな形で始めた、子育てのための場所づくり、時間づくりの中に、最近力強い変化があるなと思っていて、お父さんたちの力が加わってきたと感じます。そこで先頭を切って旗を振っていらっしゃるお1人が安藤さんなんです。

安藤さんはなぜパパの力、男の子育てというところにこだわっていらっしゃるんですか。女性だけがやっているのでは何か足りない？。

【安藤】 今、地域の崩壊みたいな話が出ていましたけれども、母親の育児を支える身近なネットワークが今ない。特に東京はそれが顕著だから、よりパートナーのお父さんが関わって支えていくことが大事だと思っています。今、首都圏の大企業に働くお父さんの長時間労働が、子育てにおいて大きな問題になっています。お父さんが帰ってこないと孤立化した母親と子どもだけの家庭の中でいろいろな問題が起きている。それと、父親が育児に関わることによって、幼児教育的にもメリットがある。早くから社会性を身につけたり、あるいは言葉の発達もそうですけれども、いろいろな意味でいいことが多いわけですね。それをやらずして子どもが思春期になって問題を起こしたら出ていけばいいという、昔のお父さんと同じようなことを考えていては今は厳しいです。昔はセーフティーな地域のネットワークがあったから、さっき出ていた、近所のがんこおやじみたいな人が父親代わりになってくれたんだけど、今そういう人がいない中で、子どもの自立を促すような、ある種、母親との依存を断ち切るような役目の人がいない。だからこそ、そこに父親が関わっていった父性を発揮するということが大事だろうと思っています。

父親が育児に積極的に関わることは、お父さんのためにもなると僕は思ってます。長時間労働はお父さん自身の健康を蝕みます。企業でうつ病が増えたり、過労死が増えたりしていますね。これは本当になん

とかしなくてはならない。

一方で、父親の子育て参加は地域社会の活性化にも貢献できるのです。僕は今、子どもの通う公立小学校でPTA会長をやっていますが、お父さんのPTA参加を促しているんです。なぜかというと、仕事ばかりで寝に帰っているだけのお父さんって、すごく多いんですね。地域と全然接点がない。それだと地域にネットワークとか友達が全然ないまま、ずっと行って、定年になっちゃうんです。定年になった途端、行くところがなくなっちゃいますから、そのときに地域で何か活動しようと思っても、だれも友達がいないから何もできなくなっちゃうんです。今、「中高年の地域デビュー」という言葉がありますけれども、団塊の世代の人で仕事一筋だった人は困っているんじゃないかな。どうしていいんだかわからない。お母さんたちはPTAとかいろいろやる中で、自然と地域にお友達ができたりして、子育てが終わったら、友達と何かサークルを始めたり、それこそ子育て支援のNPOをつくったりされるんだけど、父親たちはそういうネットワークや情報がないから動機ものが全くないので、地域で遊べないんですね。

だから、僕らはお父さんたちに、家庭だけでなく地域でも父性を発揮しようと言ってます。そうしないと自分が定年後困っちゃうよって。父親が子育てに関わるということは、子どものためもあるけど、ある種、お父さんのため。子育ては「街育て」なんだよと。だからお父さんたちをどんどんPTAに参加してもらおうような、楽しいイベントを組んだりしています。

【榊原】 お父さん自身のためにもなるし、まちづくりのためにもいい。いいことづくしですよ。

【安藤】 そうなんですよ。

【榊原】 私は猛烈サラリーマン世代の父に育てられたので、お父さんは子育てするものだとは全く思わずに自分自身は育ってきたんですけれども、それでも地域の中でいろいろなおじちゃんに遊んでもらったなというところはあったんです。日本では今の若いお父さん、特に今、30代後半のところは各世代の中でピークの長時間労働をしているんですね。日本は、残業天国と言われるくらいに、先進国の中で最も残業が多い。当然その中で過労死もうつも起きているというような状況にあるんですけれども、そういったお父さんたちもどんどん仕事に追い詰められている。そういう生き方でいいんだろうか、それだけでいいのかというふうにご自身も、健康からも家族との関係からも気付かれることが増えているんだろうと思うし、今の安藤さんのお話を伺って、老後のためにもなると。なるほどという感じなんですけど、確かに地域での活動をやっている、男の人たちがいなくて女だけでやる、ちょっと弱さとか、限界というのがある。そこにやはり老若男女いろいろな方が入ってきてやることで活動も力強くなるという面があるのかなと思って伺いました。

こちらの若い世代の男の方たちは、そういうお父さんの育児のイメージって、お持ちですか。多分ご自身のお父さんたちは皆さん、それこそ働き蜂世代でいらしたんじゃないかなと思うんですよ。お母さんが多分一生懸命家のことと育児をなさって、お父さんはずっといなくてって。さきほどそういったお話もちらっとあったんですけれども、自分はそういったようなお父さんやお母さんの生き方をできたら自分もやりたいなと思っていらっしゃるのか、自分はできたら変えたいと思っていらっしゃるのか。まだデビュ

ーなさっていない原田さんとか中島さんとかはいかがですか。原田さん、どうですか。今は、まさにお仕事も忙しくてという話がありますよね。その中で、さらに、より現実的に考えていらっしゃると思うんですが。

【原田】 先ほど安藤さんもおっしゃられたとおり、多分、親としてのライフスタイルの変化、変革といえますか、老後どうしなければいけないというところも見据えた流れになってきているのかなというのは思っていて、その中でどんな父親になりたいかという、私は、子どもに近い存在でいたいなと思っています。もちろん父親としての威厳も必要だと思いますけれども、子どもと対等の目線で話ができるような親になればなと思います。

例えば、公園が少なくなって、緑が少なくなってというお話がありましたが、現実には現実で受けとめなければいけないのかなと考えています。その中で、子どもが何に興味があって、どういうことを一緒に遊んであげたら喜んでくれるのか、例えば、それが家のテレビゲームであってもいいかなと思っているんですね。それを楽しんであげることで、「お父さん、こんなこと仕事しているんだ。昔はこういうふうの外で遊んだりしていたんだよ」という話をすれば、それが子どもに対してもいい影響になって、じゃあ、おれも外に行って遊んでみようかなとか、お父さんと一緒に遊んでみようかなというふうに見えるような話ができればいいかなと思っています。

そういった意味で、父親としての立場もありますけれども、友達じゃないですけども、なるべく近い存在で見れるような人になればいいかなと思っています。

【榊原】 原田さんは、「子育てってかっこいいな、やってみたいな」という感じですか。それとも、「ちょっとしんどそうだし、僕はちょっと苦手かもな？」みたいなイメージですか。

【原田】 どうでしょうね。(笑)多分、自分の性格上、楽しんでやると思います。さきほど言ったように、子どもは何に興味を持っているんだろうかというところを考えながらやっていくのかなと。恐らく、多少やり過ぎて嫌われたりもするかもしれないんですけども、やはり子どもが何をしているかというのを常に意識してやっていく。

【榊原】 さきほど薬丸さんがおっしゃっていたように、子育てを楽しめているかどうか、それが多分自分のお子さんはもちろんだけれども、周りの後輩の人たちにも伝わるかどうかというところは、やはりあるだろうなと思うんですよ。去年の秋にフランスに取材に行ったんですが、フランスの人がどんどん子どもを産んでいるのは、たくさん子どもを持っているととても楽しそうというイメージを皆が持っていて、自然にいろいろな形で感じているからだと思いました。別に国に産めと言われていたわけでもないし、年金や老後のために必要だって、そんなことを考えているわけではなくて、子どもを持っているライフスタイルってとても楽しそうと思っていて、できるだけ家族を増やそうと思っているというような流れが若い人たちの中にあるんだなと思ったんですが。



【(左) 篠さん (右) 原田さん】



原田さんは、今はまだご結婚もされていないし、当然、出産計画はないと思うんですけども、こんな子育てができるんだったら自分も楽しめると思われるようなものがありますか。

【原田】 楽しいと多分思えると思います。その状況になってみないとわからないというのはあるんですが、皆さんの、特に横田さんのお話なんか聞いていると、自分も楽しまなければいけないんだなという話を聞いていると、自分も何か楽しくできそうだなというところがあります。

【薬丸】 理想と現実の違いはありますからね。(笑)きれいな事ばかりは言いませんけれども、でもやはり、理想と現実の違いはありますが、その現実に関心したときに、どういうふうに関心して行動に移せるかということがすべてだと思います。

## ママを支えることも子育て

【安藤】 理想とか完璧を求めると、大抵現実の壁にぶち当たるので、完璧でなくて、最善を尽くせばいい。一番いいと思うことをやっていけばいいんじゃないかな。奥さんと話し合いながらね。

【薬丸】 そうですね。この話し合いというのは非常に僕も大事だと思うんです。

【安藤】 僕らのセミナーに来るお父さんに訊いても、平日は残業でくたびれて家に帰ってきててもあまり奥さんと話していないという人が多いですね。子どもは親の会話を結構聞いているもので、それによっていろいろな情報を得て大人の世界を知るんですよ。

それと平日は帰っても子どもの寝顔しか見ない。だからおれは子育てできないんだって悩んでいるお父さんがいるけど、そうじゃなくて、ママが起きていたらママの話を聴いてあげよう。「今日、こんなことがあったの。この子、こんなふうにしたのよ」という話を聞いて共感してあげることは大事。それでママの気持ちが安定すれば、それが子どもにも伝わって、子どもの情緒も安定して、発育もいいと僕は思う。子どもに直接関わることだけが子育てではないよと言いたい。

【榊原】 なるほどね。妻のサポート。妻のケアも……。

【安藤】 そうです。ママを支えるということが、パパの子育てですごく大事な役割だと思うんです。

【榊原】 なるほどね。

【薬丸】 本当に。それは。僕も会話しながら、本当に4人目ができたぐらいからですね。3人目ぐらいまでは、うちの妻は、子どもを産むときも、全員30分かかっていないんですよ。

【榊原】 すごい！

【薬丸】 出産の達人だと思うんですけど。全員かかっていないんですよ。4人目に関しては、自分で「来るかな」という予感がして、電車に乗って病院に行くと、30分後に生まれていますから。

【安藤】 すごいですね。

【薬丸】 いや、本当、そこは尊敬するんですよ。でも、やっぱりやっていくうちに、4人目が加わることによって自分がやっていた許容範囲でのことができなくなったりして戸惑いが出たんです。そこでやっぱり会話をして、奥様方というのは、もちろんご主人が稼いでくれたら、そのお給料をうまく家計

簿で、お金のやりくりというのはされていると思うんですけども、僕は時間のやりくりもしようというふうに話したんです。時間のやりくりというのは、じゃあ、この日のこの時間とこの時間は休みだから、家にいるから、ママたちと食事に行っていよいよとか、どこか自分の時間を使って映画でも見てきて、舞台見てきてというふうに。そこで奥さんのガス抜きの時間も作ってあげないと、もう育児をされていて、家庭内のこともすべてしていて、それは風船が破裂してしまうんですよ。それで破裂したところで、ご主人が帰ってきて。何か聞いてもらいたいから言っても、聞いているんじゃないかと、一応聞こえているだけなんです。聞いているんじゃないんですね。

【榊原】 なるほど。耳が痛い方、いらっしやいませんか。

【薬丸】 そうすると、そこで一言返すじゃないですか。もう破裂しそうな風船ですから、これが言い合いになって、時にはそれが修羅場となってしまうわけですよ。

【安藤】 男って、そういうときにまた議論をふっかけたりする悪いくせがあって、ただ聞いて、「ああ、そうだね。大変だったね」って共感していればいいのに、「それはおまえがいけないんじゃないか？」とか意見しちゃって、奥さんから返り血を浴びてる。

【薬丸】 そう、一番いけないパターンは、「前のあの時もこうだったよな」って、昔の話を持ち出すこと。これは絶対にしてはいけないですね。

【安藤】 そうそう。それ言うと、向こうも全然忘れていたことをまた思い出して、「あの時、あなたはこう言ったわ」とかって話になって、修羅場と化するという。

【榊原】 なるほどね。そこのところはまだ……。

【薬丸】 何か未来ある学生さんたちに……。

【安藤】 未来がなくなっちゃうか……。

【薬丸】 夫婦形態って、そんなことなのって。

【安藤】 いや、でも、それもやっぱりコミュニケーションの1つなんだよね。

【薬丸】 これは現実ですからね。

【榊原】 まだ今、身に差し迫った思いはないでしょうけれども、必ずだれにでも関係してきますから、ぜひどこかに書き留めておいてください。そうですね。コミュニケーション。

【安藤】 自分はこうしたいと思うんだったら、相手が何を望んでいるかということも聞いてあげないといけない。

【榊原】 それはお互いですね。

【安藤】 薬丸さんがおっしゃったように、自分が遊んだ時間があったら、その同じ時間を奥さんにあげないといけないなと思いますね。

【薬丸】 それはすごく大事ですよ。

【榊原】 なるほどね。家計だけでなく時間のやりくり。いいですね、それね。



【安藤】 時間との闘いですね。

【榊原】 そうですね。さっき篠さんもおっしゃったけれども、サラリーマンのほうが、赤ちゃんの世話よりも、子育てよりもよっぽど楽だと。実は私もとてもそう思っていて、子育て専従のお母さんたちのほうが本当にいろいろな意味で大変な思いをして、私は保育園に預けさせてもらって、随分半分ぐらい楽をさせてもらったって密かに思っているぐらい。本当に大変な、人間を未熟なところから育てるという営みがどれぐらい大変なものなのかというのをつくづく思ったところなのですけれども、そこでちょっと時間のやりくりとか、ちょっと気持ちをわかってくれる人がいるというだけで、相当また頑張ろうかという気持ちにもなりますよね。そこが確かに楽しめているツボかもしれませんね。薬丸家でね。

【薬丸】 やっぱり自分を追い込んでしまうと楽しくならないと思うのですよね。

【安藤】 こうしなければいけないとかね。

【薬丸】 そうですね。

### 分かりにくい？自治体の子育て支援制度

【榊原】 なるほどね。確かに。それで、そうやって子育てを普通の生活だから、いろいろなことがあるけれども、楽しんでいるなというような先輩が増えてくると、若い人たちの子育てのイメージもちょっと変わってくるといいなという感じがあるのですけれども、ここでちょっと、会場の皆さんにも1つ伺ってみましょうか。

最近「子育て支援」という言い方がよく使われていて、地域の中でも、例えば、退職した高齢者の方とか子育てが終わられた女性とかが、いろいろな形で子育て支援というものに関わられたり、または行政が仲介して、ファミリー・サポート・センター（6）というような取組があって、ちょっと子育てのときに近所の手を借りたいという方と、ちょっと手を貸してもいいわよという方をつなげるような取組を行政でも始めていたりしているのですけれども、そういった子育て支援の地域の制度について、知っている方ってどれぐらいいらっしゃいますでしょうか。私は子育て支援、例えば近所にこういうものがあるとか、こういう制度があるって知っていますよという方は、この白の「イエス」、いや、ちょっと見たことも聞いたこともないという方はオレンジ(ノー)。どうでしょう、皆さん、ご存じですか。

【榊原】 なるほど。(イエスが多く上がる。) 結構いらっしゃる。その中で、使ったことがあるという方、私は子育て支援の制度を使ったことがあるという方はどれぐらいいらっしゃいますか。

【榊原】 ちらちら。その小学生のあなたもありがとうございます。

日本で子育て支援という形で行政も関わって、一生懸命やり始めたのが本当にここ10年、さらにそこに、もう少し本気な、いろいろな取組が加わってきたのはこの5年ぐらいかなと思っているのですけれども、相当皆さんの中にも、知っているとか見たことがある、使ったことがあるというのが出てきたと思

※6 ファミリー・サポート・センター：育児の手伝いをしてもらいたい人と子育てを援助したい人が会員になり、保育所までの送迎などをする有償ボランティア活動。区市町村が設置し、運営を行っている。

います。

では、「子育て支援に参加したことがある、私は何か手を貸したことがあるのですよ」という方、もちろん子育て中の方でも結構ですし、学生さんでも結構なのですけれども、子育て支援に力を貸したことがあるという方、どんな小さな活動でも、1回でも結構です。白(イエス)を。ちょっと無いなという方はオレンジ(ノー)を。いかがでしょうか。

【榊原】 結構いらっしゃるんですね。ありがとうございました。こちらから見させていただくと、関わったことがあるという方が半分弱ほどいらっしゃいました。そういったバックグラウンドのある方が、このような場には多く来てくださっているからかもしれないのですけれども、こうした地域での支え合い、さきほどの薬丸さんの話にもあった、前だったら自治会のおじちゃんとか、商店街のおじちゃんとか、集落のこわいおばあちゃんとかというような方が自然に関わっていたところを、このようなもう少し人為的なシステムとしての場で、地域の方が関わっていくような場が、もっともっと増えてきたらいいなというような感じがしています。

横田さんや篠さんは、子育て支援とかはもうお使いになったこと、何かお世話になったり等ということはありませんか。

【篠】 僕はある市町村に住んでいまして、いろいろとそういった情報がないかと思って、ホームページで探してみたりしたんですけれども、どこにも載っていないんですよ。

【榊原】 ホームページに載っていなかった？

【篠】 子育て支援について、載っていなかったんです。

【榊原】 それは市町村のホームページ？

【篠】 そうなんです。もっとよく調べれば出ているのかもしれないんですが…。

【榊原】 今、どこもやっているから、本当ならあるはずなのに、見つけにくかったんでしょうね。

【篠】 そうですね。そうだと思うんですけれども、ですから利用したことはないですね。

【榊原】 横田さんはいかがですか。

【横田】 市のホームページや福祉会館みたいなところに電話して聞いたりということはありません。第一部に出演された杉山先生と主人が親しくさせていただいている関係で、「こういう所でこういうことをやっているよ」という話は聞くんですが、実際にはまだ行ったことや使ったことはないです。

【榊原】 ありがとうございます。篠さんは、関心を持って調べたけれども見つけられなかったということですね。篠さんなんかは、見つかったら、ひよっとしたら何か使えていたかもしれないわけですよ。今、東京都内でも、自治体によっては、いろいろな子育て支援の情報を1冊にまとめたガイドブックを作ったり、いろいろないい取組が始まっているんですけれども、まだ始まっていたり、始まっていなかったり、いろいろなところがあって。そこは行政のほうでぜひやっていっていただきたいところだと感じるところです。

## これからの子育ての鍵を握るのは男性たち

【榊原】 あまり時間がなくなってきたので、ぜひ最後に伺いたいのが、お父さんの関わりのところなんです。さきほど子育てを楽しめるというような状況ができるのは、お母さんと子どもだけじゃ多分大変過ぎて、横田さんが楽しめているというのも、ご主人の関わりがあつてのことと。薬丸さんの奥さまが、4人も産んでもいいわと思われるのは、おそらく陰に日向に薬丸さんのパパの支えがあつてのことだろう。安藤さんは、声に出して言っていらっしゃるけれども、これからの日本の子育て、もっと楽しめるようになっていけばいいなというときに、鍵を握っているのは、実は企業もそうですし、行政もそう。女性ももちろんそうなんだけれども、お父さんたち、男性たちじゃないかと。では、そんなお父さんに、これからどんな役割を期待したらいいのか、どんなことができるのかしらというところを改めてすこしお話ししたいのですけれども、先ほどおっしゃっていただいたのが、奥さんの話を聞くのも1つということですよ。安藤さんは絵本を読むところから始められたということですが、育児デビューにどうしたらよいかという認識というのは、まだ男性の中にはあまり育っていないんじゃないですか？

【安藤】 そもそも日本の男性は、長らく子育てから遠ざけられていた存在なので、いきなりやろうと思っても、どうやっていいのか分からない、子どもとどう向き合えばいいか分からないという人は多いと思います。お母さん向けの情報は雑誌などはたくさんあるんだけど、日本には父親向けの子育てに関する情報があまりにもなさ過ぎると感じています。

あとは、楽しんで育児している父親のモデルがない。ないというか情報化してないですね。だから、薬丸さんのように楽しんでいる人が増えてくれば、若い世代は薬丸さんをよいロールモデルとして参考にすると思います。今30代、40代の男性は、自分の父親、自分を育ててくれた高度成長期を支えてきた企業戦士のお父さん、つまり戸籍上はいるんだけど、家に存在していないお父さんのモデルしか見ていない方がほとんどなので、自分もそのとおりにやればいいんだと思っちゃうんですよ。でもあの頃とは、社会情勢、経済状況、子育て環境とか、いろいろな状況が明らかに変わってきている。その変化に気付かず、父親と同じスタンスでやっていると、たちまち立ち行かなくなるということをまずは認識してほしいなと思うのです。

【榊原】 安藤さんはどうしてお気づきになったんですか。安藤さんのお父さんは子育てを楽しんでいるお父さんだったんですか？

【安藤】 父親は昭和3年生まれの公務員。家にはいたけど、やはり子育てはどちらかというと母親任せで主体的にコミットすることはなかったですね。絵本を読んでもらったこともないし、あまり遊んでもらった記憶というのがないんですね。だけど親戚が身近にいたし、近所には原っぱがあつて、よその家のおちゃんとかに関わって、何となく多様な父性を見てきているんですよ。でも、今の子どもたちにはそれが無い。だから、よりお父さんたちが育児や地域活動に積極的に関わってほしい。

【榊原】 具体的に「パパ力検定」の中身、ちょっと紹介していただいたんですけども。会場の皆さんに、私たちも含めてなんですけども、チェックするポイントを、どういうものをパパ力と考えればいい

のかというのを幾つか出していただけますか。

【安藤】 妊娠期とか出産とか、乳幼児期の問題もあります。これは生活の基本として大事なと思います。例えば、「子どもの乳歯の数は何本ですか」という問題がありますが？

【榊原】 それは、答えを、1と2で出して、やってみましょうか。

【安藤】 1が24本、2が20本。

【榊原】 24本か20本か。では、皆さん、いってみましょうか。パパ力だけでなくママ力も問われてしまうので、私もちょっとドキドキなんですけれども……。

【安藤】 みんな今勘定していますね。

【榊原】 お子さんを見ちゃだめですよ。子どもの乳歯の話は20本だと思われる方はイエスの白、24本と思われる方はオレンジ。では、どうぞ。

【安藤】 案外分かれましたね。

【榊原】 きれいに分かれていますね。大先輩の子育てのママたちもいらっしゃいますけれども、では、お答えのほうは？

【安藤】 正解は20本です。

【榊原】 20本。どうでしょうか。私ももう10年前のことで、自分も怪しいという感じなんですけれども。あとはどういう質問があるんですか。

【安藤】 育児休業で男性も女性もとれる権利を持っていますけれども、とった場合に給料は無給になってしまうんですけれども、国から給付金(7)というのが出るんですね。それが何パーセントもらえるでしょうかということです。1が70%。2が50%、3が30%。どれでしょうか？

【榊原】 1、2、3の答えがこれにはないんですけれども……。(笑)

【安藤】 じゃあ、70%と50%にしましょうか。

【榊原】 70%と50%。育児休暇を、だからサラリーマンですね。サラリーマンで……。

【安藤】 雇用保険に入っている人ですね。

【榊原】 雇用保険に入っている方ならずすべて育児休業というのをとる資格があって、お休みに入ったら、もちろん働いていないわけですから、給料はなくなるはずなんですけれども、雇用保険のほうから休みに入る前の賃金の一定割合を出してくれるというシステムになっています。例えば、北欧などでしたら80%など、かなり高い割合の金額を出してくれるような育児休業制度を持っている国もあるんですね。

さて、今の日本では、どれぐらいでしょうか？70%になりましたという方が白、もう1つが50%ですという方がオレンジ。どうでしょうか。

※7 育児休業給付(平成20年2月現在):雇用保険に加入している労働者(満1歳(理由により1歳6カ月)に達するまでの子を養育するために育児休業をする被保険者で、原則、休業開始前2年間に賃金支払基礎日数が11日以上(月が12カ月以上ある者)に対する給付金制度。育児期間に支給される「育児休業基本給付金」と育児休業が終了して6カ月経過した時点で支給される「育児休業者職場復帰給付金」がある。は、休業した1カ月につき休業前賃金の30%、は、休業した1カ月につき休業前賃金の10%が給付される。なお、平成19年3月31日以降に職場復帰した人から平成22年3月31日までにの支給対象となる育児休業を開始した人は、暫定的にの給付率が20%相当となり、全体の給付率が50%となる。

【榊原】 これも分かりますね。正しい答えは？

【安藤】 正解は50%です。ただ、50%も、最初とる前には30%しかもらえないんですね。復帰したときに復帰給付金ということで20%が上積みされて、合計50%。昨年3月までは40%だったんです。やっと10%上がったんです。まだ日本はこのレベル。

【榊原】 私が休んだときには、育児休業制度があったんですけども、もらえていたのが25%だったんですね。

【安藤】 そうですね。それじゃあ誰もとらないですね。

【榊原】 それも、本当に休んで、戻る気があるかというのを確認した上で、その後、手続をして、正しくあなたは休んだと分かたらもらえるという感じだったので、本当に無給が続いていたことがあって、育休というのはなかなか大変なんだなと思いました。50%になったのもよかったと思うんですけども、ただ、この育休の50%の問題というか、難しさは、これでは男の人 大体男の人のほうが一家の主なほうの柱であるわけであって、そういった世帯にとっては、「パパはちょっと休んでもらったら困るよね」ということになりがちということですよ。これが男の人でも安心して休めるようになるには、せめて北欧のように高い割合の保障にならないと難しいのではないかということが言われていまして、一部の企業では有給のような形で、1週間とか2週間だけれども、育児休業をとるお父さんには全額給与保障するというようなところも出てきて、そういうことが始まった途端に育休をとるお父さんが増えたということもあるんですよ。これも子育てをしている本人たちだけでなく、周りをもっとしてあげられることの1つかなというふうに感じます。

そのあたりで、実際のお父さんとしては、こういうようなことがもっとサポートとしてあったらいいなというふうに自分が子育てを楽しむ、夫婦で子育てを豊かに楽しむようになるために、こういうものがもう少しあったらいいと思われるようなものがもし具体的にありましたら。

【篠】 僕は立ち会い出産をして、会社にまもなく生まれそうだということを報告したら、社長が2週間休んでいいと。「とにかく奥さんのそばにいてあげて、出産に立ち会って、その後のフォローもしっかりしてきてあげなさいよ」というありがたい言葉をいただきました。そうであれば喜んでということで、僕はずっと新潟にすることができたんです。その体験から言うと、個人差はあるとしても、精神的にも肉体的にも、女性が1年間もかけて子どもをおなかの中で育てて、子どもを産むというのはとても大変なことだと思うので、それだけの仕事をやってのけた人を、出産後、絶対フォローしなければいけない、旦那としての義務だなと思いました。子どもがちょっと泣かなかったり、具合が悪かったりすると、精神的にすぐ不安になりがちなところがどうしてもあるんですが、そういうところでそばにいてあげられるというのはとても僕自身もよかったし、奥さんにとってもとてもよかったんだと思います。

僕の場合は、その期間というのは有給で、特に給料を差し引かれるとか、そういったこともなく対応していただけたので、非常に助かったんですね。ですから、そういう会社であったり、例えば会社がそういうものを負担するのが大変であれば、国や各自自治体が負担するとか、いろいろとハードルは高いとは思



ますが、そういう制度ができ上がってくると、もっとよくなるのではと思います。

【榊原】 同じように子育てを始められた横田さんとしては、「こんな環境がもっとあるといいな」と思われる思いがあったら、ぜひここでぶつけておいてください。

【横田】 そうですね。そういうものがあつたほうがいいとは思いますが、今の状況だと、実現しにくいのかなというのがありますね。

【榊原】 それは、どういうことですか。

【横田】 やはり会社や周りの人の協力なども考えなければいけないですし、自分たちだけの問題ではないところもあります。本当に周りの人たちの協力があってこそなので、そのようなことを考えてくれるという気持ちさえあれば、おそらくほかの周りの人たちも会社も手伝ってあげようというふうになると思うんですけども、今はまだ難しいのかなと思います。

【榊原】 職場の中の環境のことですね。

【横田】 はい。

【榊原】 地域ではどうですか。ご自身の身近なところでもいいんですけども、今、子育てをまさに楽しくやられているということなんですが、その中でもこれがとても大事だなと思っていらっしゃるものがあるとか、もっとこれがあるとさらにいいなと、何かもし感じているものがあるれば。

【横田】 今は本当に子育てが楽しいので、これ以上どう楽しくしていこうというのは…。どのように成長していくかは赤ちゃん次第によって変わっていきますし。

先輩ママさんや友達のママさんが近くにはいないので、話し合ったりするのは電話やメールなどですし、母ももう他界してしまっています。私には頼る人がいなかったんで、自己流で全部やっていますが、逆に本当に楽しく、多分お母さんはこうやって私を育ててくれたんじゃないかというふうに考えてやっています。

でも、お正月に(子どもが)ソファから落下したんですね。そのときに泣かなくて、ちょっと焦って、救急へ電話をしたら、「うちじゃないです。ここに電話してください」と言われて、救急に電話をしたら、「うちでは取り扱っていないので警察に電話してください」と言われて。警察に電話をしたら、今度は「消防署に電話してください」と、4回も電話をかけるはめになってしまったので、そういうところはもう少し徹底して、夜間でも救急でも、すぐに病院が分かるようにしてほしいなと思いました。

【榊原】 ありがとうございます。学生の中島さん、高橋さん、酒井さん、これからの働き方のことで会社に向けての視線を語ってくださったんですけども、これからまさに社会の中の大きな力になって、皆さんが支え手になっていって、日本の中の力になっていくわけなんですけれども、その中で酒井さんは既に子どもとこれまでも関わってこられたり、高橋さんも子育てもしていきたいとおっしゃっていたり、中島さんは育休をとってみたいとおっしゃっていたり、そういったような子どもと関わりたいという思いを実現していくために、「職場はこうあったらいいな」とか、「自分のこれからの生活はこうあったらいいな」と今思っていることは何かありますか。中島さん。

【中島】 先ほどの安藤さんのクイズで、育児休暇をとったときに給付が出るということを知らなかったもので、そういう知識を取り入れられたら、もっと子育てしやすい環境になるのかなと思います。

【榊原】 高橋さん、どうですか。少子化のこともいろいろ調べていらして。

【高橋】 皆さんの話を聞いていて、環境はとても大事だなと思いました。具体的にどのようなことが考えられるかというのを考えていたんですけども…。例えば、国の制度などを変えるというのはすごく難しいと思うんですね。時間もかかると思いますし。ですから、大きいことを変えるのではなくて、小さいことから変えていけば、直に大きいことも変わるのかなと思います。横田さんが、お母さんが周りにいないということをおっしゃっていたので、その地域ですぐお母さんたちが集まれるような会をつくるというのも1つの手だと思うし、例えば駅の近所に保育所とかをつくれば、行き帰りにすぐお子さんを受け渡しできるから、時間が省けるというか、それを苦に思わないで済むと思うので、何か大きいことじゃなくて、小さいことから変えていければいいなというのをとても感じました。

【榊原】 酒井さん、どうですか。この春から社会人ですね。

【酒井】 そうですね。いろいろ子育てしたいとか、そういう気持ちももちろんあるんですけども、そういうことを本音で素直に言える会社だといいなととても思います。というのは、最近父と母とで、お酒を酌み交わしながら、「おまえを育てるのはすごく楽しかった」と言われまして、そういう両親にとってもあこがれる



ところがあり、そういう本音の話が親とできるのも幸せだなと思っていまして。ですから、会社でも、本当に自分は子育てを楽しみたいから今休みたいというのが素直に言えるといいなと。それにパートナーに対しても「私は今、子育てを楽しみたいから協力してほしいんだけど」と言えるようになるといいいし、願わくば、そのパートナーが育休を自分の会社に対して働きかけるような人だったらいいなと、そういう本音をもっと言える社会になったらいいなと思いました。

【榊原】 なるほどね。男性も本当はとりたいと思っているのに言えないというのであれば、本音が言えてないという見方もできるわけですね。まさに、そのお仕事の現場で、本音どころではないような忙しい毎日もあると思うんですけども。「パートナーが育休をとってくれたらいいな」という思いの女性は増えているようなんですが、原田さん、いかがでしょうか。

【原田】 仕事をどう自分で改善していくかということも考えながら、奥さんの気持ちも考えながらということがあろうと思うんですが、自分の仕事をどのように軽減して、改善していくかということを意識して、そういうことを子育てにも従事していくようになればいいかなと思います。

【榊原】 そうですよ。まず自分の人生をちゃんと充実していないと、子育てにも向き合えないというのは確かにありますよね。ありがとうございました。

若い皆さんの意見をいろいろ伺いながらだったんですけども、最後にぜひ、先輩格のお2人から一言ずついただきたいと思うんですが、安藤さんのほうから最後に。

【安藤】 今日、東京都のフォーラムですね。東京の問題は、僕は2つだと思うんです。一つは企業に勤める男性の長時間労働の解消。これを早くやらないと子どもや母親はますます辛い状況になると思います。それから2つ目は、地域社会の崩壊ですね。地域で次世代を育てるという流れをもう一度取り戻したい。

これをみんなで考えて、何とかしていく。両方とも社会問題じゃなくて自分問題だというふうに考えることが大事だと思うんです。いま社会で子どもを取り巻くいろいろなことが起きているけれど、対岸の火事じゃなく、自分の身におきてもおかしくないと考えることが大事なんですよ。評論家である前に、当事者でいましょうよ。少子化も、地域の問題も、あるいは長時間労働の問題もね。その意識をまず持ってほしいなど。

それから、子育てというのは、義務である以前に楽しい権利なんだと。子どもと自分が成長できるチャンスなんだと考えて欲しい。僕は10年間子育てを楽しんできたから、自分も成長できたし、いま子どもとすごくいい関係でいられます。だから3人目もできたんだと思う。と、口で言うのは簡単だけでも、それを実感できる日々の暮らしをどう自分でアレンジしていけるか。自分の人生と子どものいる暮らしをどうデザインしていけるかということだと思います。

子どもはあっという間に大きくなってしまふ。育てた人はみんな言います。だから、お父さんたちによく言うのは、今しか子どものいい表情は見れないよと。いまが一番楽しいんだよと。子どもなんてすぐ大きくなって、巣立っていっちゃう。あのときやっておけばよかったと思って後悔しても、その時間は取り戻せないですよ、と言いたいのです。

【榊原】 ありがとうございます。薬丸さん、お願いします。

【薬丸】 今、安藤さんからもお話がありましたけれども、楽しむということが大切だと思うんです。それは、無理ない程度に。あまり大きな目標を掲げてしまうと、どうしてもそれに向かって縛りが出てきてしまうので、ある種楽なスタンスで、できることからコツコツとやっていったほうがいいんじゃないかなと思いますし、自分1人で行政とか国を動かせないというふうには、皆様も思っていると思うんですけれども、そういう小さな声の積み重ねが国を動かすこともあると思いますので、そこら辺はやめないで、今後も提案していただきたいと思います。

## ベビーブームに沸くフランスと日本との違い

【榊原】 ありがとうございます。さて、もういよいよ終わりの時間ですが、皆さん、いかがだったでしょうか。子育てについて、皆さんそれぞれの問題意識を持って、多分今日ここにご参集いただいているんだと思うんですけれども…。若い世代の方たち、特に学生の方たち、これから社会に出て、こういうことをやりたい、ああいうことをやりたい、いろいろな思いを持っていて、既にもう就職を決められている方もいらっしゃる中で、その中で子育てについてもこうしたいという思いがあって、どうも少なくとも40代以上、50代以上の世代とは違う思いを持っている方たちがいる。今の企業のシステムは早急に見直

すところは見直さないと、彼らの力を十分に生かせないのではないかというような課題がちょっと見えなかなというふうに思います。

また、子育てをしていらっしゃる若いお父さんやお母さんたち、情報が見つげにくい、いい立ち会い出産が経験できて、いい育児がスタートできたのは、実は会社のほうの後押しもあったんだというようなお話。おそらく横田さんも、ご夫婦のコミュニケーションがとても良いんだろうなというのをお話の端々で感じるんですけども…。そんな夫婦の中の関係のつくり方、いろいろなところで、ご自身たちも子育ての中で頑張っているけれども、その人たちを応援してあげる周りの雰囲気というのも大事なんだなというふうに感じます。忙しく仕事をしていらっしゃる原田さん、これから結婚、子育てというところで、いろいろお感じになったところがあるのではないかと思うんですけども、お時間が来てしまいました。家計だけでなく時間のやりくりを夫婦で大事にしようとか、子育ては実は男にとっても豊かな老後を迎えるための大事なステップでもあるとか、子育ては街育てもなるとか、いろいろないいメッセージをいただいたと思います。私自身、若い人たちのお考えをこれだけまとまって聞いたのは実は久しぶりで、いろいろ勉強になりました。

最後に一言、先ほども申しましたが、去年、フランスに取材に行っただです。ご存じの方が多いと思うんですが、今フランスはベビーブームに沸いているんですね。合計特殊出生率が先進国の中では非常に珍しく2.0を超えた。去年またちょっと落ちたらしいんですけども、フランスの政府関係者たちはとても自信を持っています。この出生率上昇のトレンドは変わらない。フランスは、このまま行くと、人口は



何年後には何人、1世紀後には何人、だから社会保障制度を守れるというふうに、先をちゃんと見通して、自信を持って回答される。その裏側には、「日本は大丈夫なんですか。これだけの高齢化になってますよね。少子化を放っておいて、どんどん進んでいますよね。大丈夫なんですか」という視線を感じました。実は外国の方たちのほうが、日本は何をしているんだろうという目線で見ているらしい。

フランスで子育てをしていらっしゃる日本人の女性に何人かに話を伺ってきたんですけども、20代、30代、40代、私たちと本当に同じ日本で育った女性たちが、フランスだから2人産めた、3人産めた、4人産めたというふうに皆さん口をそろえられるんですね。「何が違うんですか?」というふうに皆さんに伺ったんですけども、「社会全体が子どもを宝だと思ってくれているんですね」と、判で押したように

**参考資料:フランスの家族政策 家族手当金庫(平成19年3月現在)**

フランスでは、第二次世界大戦後(1940年代)、出生率が低下したため、専業主婦の多子家庭への支援強化や家族と女性の多様な生活の選択支援の政策(1970年代)がとられ、1980年以降、長期的視野から女性の就業を支援する方向へ転換された。

**児童関係手当の給付:** 家族手当や家族補足手当など。扶養者及びフランスに定住していることが条件。実質的に扶養していれば血縁関係は問わず、非嫡出子(婚外子)・養子、里親・弟・妹・甥・姪も可。

**休暇制度:** 出産休業は子どもが何人目かにより異なり、1人目は最大16週間で、産前産後の区別はない。育児休業に関しては、子どもの3歳の誕生日までの間、育児休業か短時間勤務が選択できる。

課題: 専門性を持たない労働者に育児休業取得者が多く、休業後の再就職が困難となっている。

おっしゃるんですよ。それはどういうことなんだろうと思って、もう少し細かく聞いていくと、つまりいろいろな形で、例えば、街に出たときに、年配の方からも若い人からも、男性からも、みんなベビーカーを助けてもらったり、子どもに笑顔を向けてもらったり、だだをこねたら、「あら、私のときも大変だったのよ」と一言かけてもらったり、お母さんは大変なんだ、子育てをしている人たちは大変なんだということを中心にみんながシェアした上で、それを一生懸命手伝おうと思ってくれる。どうもそういう雰囲気は日々街の中でも感じるらしいんです。

あとは社会のシステムが違くと。それは、例えば公園がとても豊かに整備されて、子どもたちも元気いっぱい遊べるようなとてもいい公園が、パリのような大都市でもあちこちに整備されている。また、お母さんたちが疲れたときに、お父さんたちが疲れたときに、ちょっと預けられるような認可の保育所、後任の保育ママさん、それから仕事をしていない女性でも使いやすい託児所、いろいろなものがすべての子育て中の人に必要なものなら揃えましょうとばかりに整えられている。そうしたシステムも通して、私たちは社会から支えてもらっていて、それは社会が子どもを宝だと思っているから。だから、子どもは大事にされて当たり前なんだという確信を子育てしている人たちが持っている。安心感になっていて、その中で子どもたちが育っていて、ああ、この雰囲気はうらやましいなと思いました。

でも、実はフランスって、たかだか90年ほど前には合計特殊出生率が1.2の国だったんですね。あまり知られていないんですけども、第一次世界大戦、第二次世界大戦のころには、出生率が先進国の中でほかにないくらい、ものすごく落ち込んだ国で、そのときにとっても強い危機感を持って、国も企業も挙げて、みんな子育てを応援しなければいけないというような取組が始まって、いろいろな試行錯誤を重ね重ねて、ここに来て、今ベビーブームになっているというこのようです。じゃあ、日本人には子育てしやすい社会をつくることはできないのかといたら、フランスを見て、そんなことは絶対ないはずだと思いました。

日本の中にも、子どもは社会の宝だという言葉は、ついこの間までであったと思いますし、子どもたちをいろいろな世代の人たちで、地域全体で大切に作る雰囲気というのは、日本にはついこの間までであった。それが急速な近代化や都市化の中で、今ちょっと失われてしまっていたり、がたがたして来ているところを、もう1回違う形で作り直せばいい。そんな感じになっているのかなというふうに感じています。

今日は、若い方たちのお言葉、それから先輩の方たちのお言葉を伺って、じゃあ私たちは、それぞれ何ができるのかなという思いを持って帰っていったらなと思います。長時間になりましたけれども、おつき合いいたしまして、どうもありがとうございました。

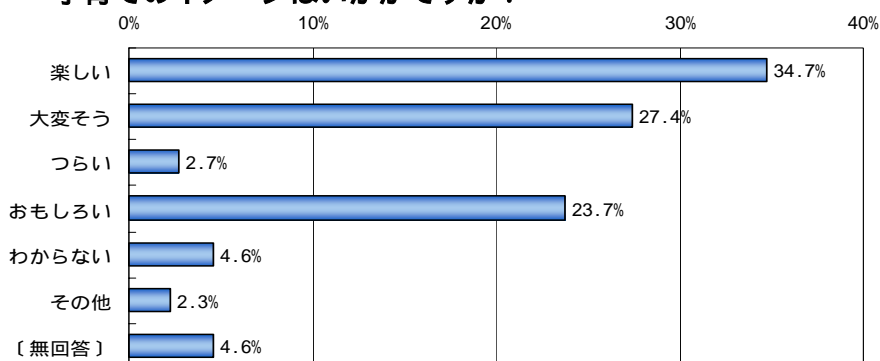
参考資料：日本とフランスの合計特殊出生率等の比較

年次	日本		フランス	
	合計特殊出生率	出生率	合計特殊出生率	出生率
1950	3.65	28.3	2.90	20.6
1980	1.75	13.6	1.99	14.9
1990	1.54	10.0	1.78	13.4
2000	1.36	9.5	1.89	13.2
2006	1.32		2.00	13.1

日本は、国立社会保障・人口問題研究所の算出による。  
フランスは、国立統計経済研究所(INSEE)の資料により、の1050年～1990年代は本土、2000年及び2006年はフランス全体の率。

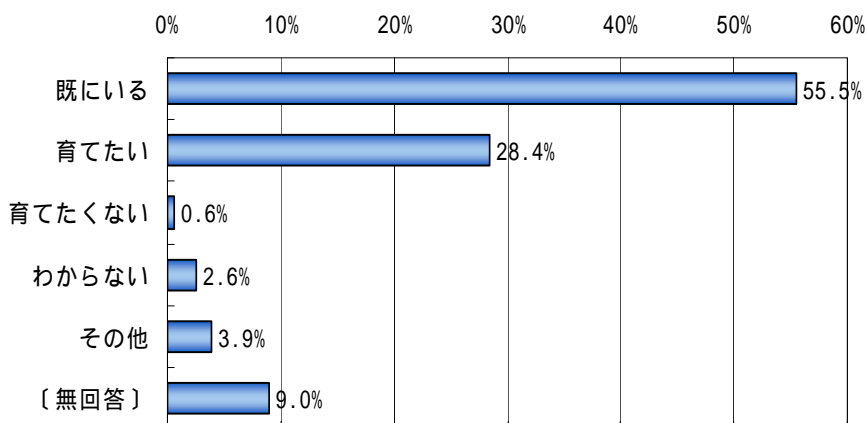
**アンケート結果** (回答数：来場者310人のうち154人)

**子育てのイメージはいかがですか？**



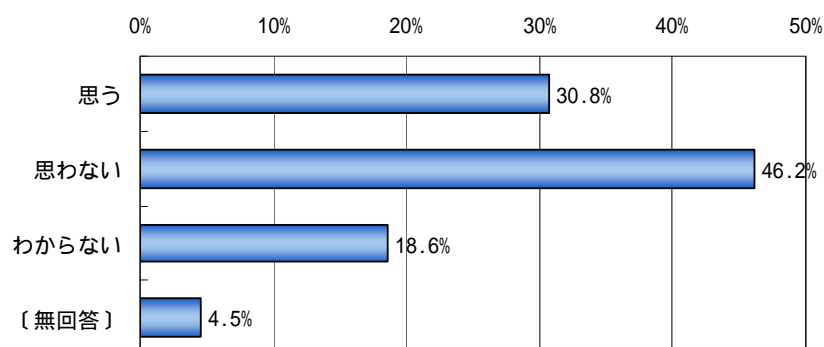
	人数	割合
楽しい	76	34.7%
大変そう	60	27.4%
つらい	6	2.7%
おもしろい	52	23.7%
わからない	10	4.6%
その他	5	2.3%
[無回答]	10	4.6%
[全体]	219	

**将来子どもを育てたいと思いますか？**



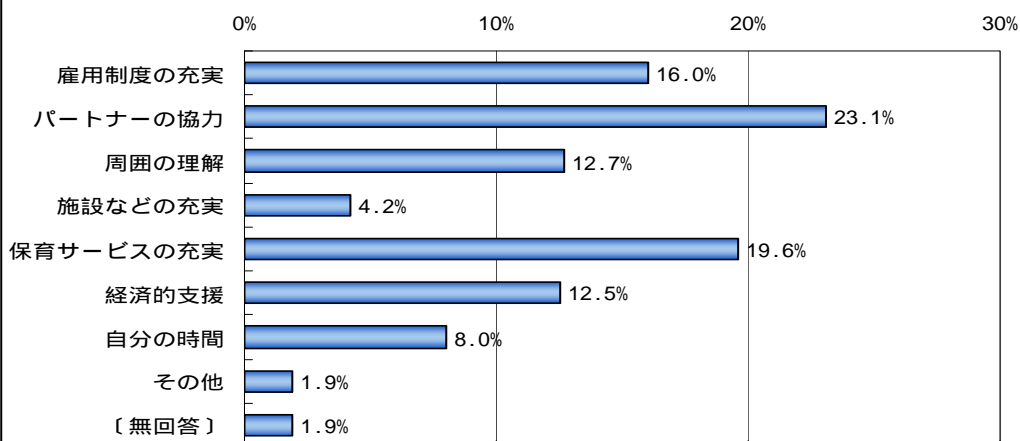
	人数	割合
既にいる	86	55.5%
育てたい	44	28.4%
育てたくない	1	0.6%
わからない	4	2.6%
その他	6	3.9%
[無回答]	14	9.0%
[全体]	155	

**東京（首都圏）は、子育てしやすいと思いますか？**



	人数	割合
思う	48	30.8%
思わない	72	46.2%
わからない	29	18.6%
[無回答]	7	4.5%
[全体]	156	

自分が子育てをするためには、どのようなことが必要だと思いますか？（複数回答）

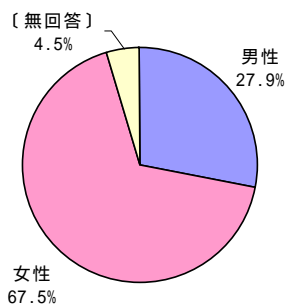


	人数	割合
雇用制度の充実	68	16.0%
パートナーの協力	98	23.1%
周囲の理解	54	12.7%
施設などの充実	18	4.2%
保育サービスの充実	83	19.6%
経済的支援	53	12.5%
自分の時間	34	8.0%
その他	8	1.9%
[無回答]	8	1.9%
[全体]	424	

参加者の属性

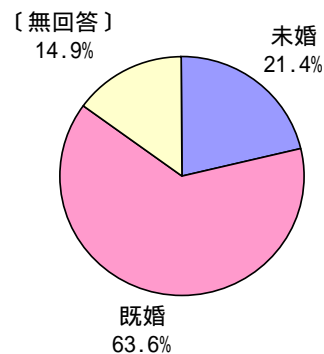
< 性別 >

男性 43人  
女性 104人



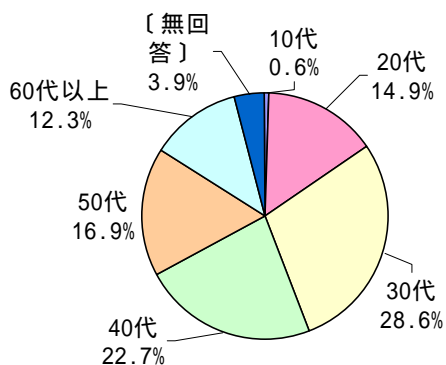
< 既婚状況 >

既婚者が 98人  
未婚者は 33人



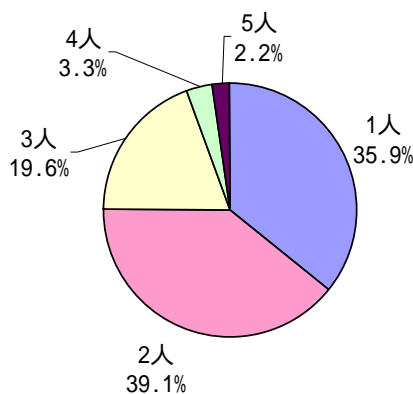
< 参加者の年齢 >

30代(44人)、40代(35人)、50代(26人)、  
20代(23人)の順



< 参加者の子どもの数 >

子どもがいる参加者は、全体の 58.4%





### 3 子育て応援とうきょう会議マスコットキャラクター等の公募

子育て応援とうきょう会議の趣旨や取組を広く都民に周知するため、その象徴となるマスコットキャラクター及びキャッチコピーを募集した。

#### (1) テーマ

子育て応援とうきょう会議が目指す「社会全体で子育てを支援する」というメッセージを広く都民に伝え、親しまれるマスコットキャラクターとキャッチコピー

#### (2) 募集内容

ア マスコットキャラクター部門：マスコットキャラクター及びネーミング...各1点

イ キャッチコピー部門：キャッチコピー...1点

#### (3) 募集期間

平成19年12月12日から平成20年2月12日(火)

#### (4) 応募状況

総数 1,780点

内訳 ア マスコットキャラクター部門(ネーミングを含む)

542点

イ キャッチコピー部門

1,238点

#### (5) 審査結果

平成20年2月20日開催の「第3回子育て応援とうきょう会議実行委員会」において以下のとおり選考した。(受賞作品は、巻頭にカラーで掲載)

##### ア マスコットキャラクター

最優秀賞1点 鹿児島県 岩倉 隆行 氏

優秀賞 3点 大阪府 前田 昌克 氏

大阪府 西田 高明 氏

東京都 原田 雄也 氏

##### イ キャッチコピー

最優秀賞1点 岐阜県 相撲 正一 氏

「東京から示そう 子育て環境日本一」

優秀賞 2点 東京都 細山田 美佳 氏

香川県 新田 憲明 氏

(6) ロゴマークの選定

子育て応援とうきょう会議で使用するロゴマークについて、平成20年2月20日開催の「第3回子育て応援とうきょう会議実行委員会」において、下記のとおり決定した。



すべての子どもと子育て家庭を支援することから「支える手」の形で表現。支える手の形が組み合わさり、星の形を形成。「星」は希望を表し、安心して子育てができる社会への実現を表している。また中央の3つの円は子育て家庭(親子)を表している。

デザインパターン縦



デザインパターン横

